

はらわた男爵の城

女の悲鳴が聞こえた。灰青色の雲に覆われた空に悲痛な声が響きわたった。黄金色に枯れた草むらの向こう、細波を立てて流れている小川の向こう岸に三人の人影があつた。

灰色の長衣のほだけた胸元を覆って逃げる若い女、それを追う革鎧を身につけた二人の兵士。

私は肩に背負つたすりきれた麻袋を投げ捨て、剣の鯉口を切つて走り寄つた。

女は水飛沫をあげて川にはいり、恐怖に乱された顔で逃げ惑う。兵士たちは銀の縁取りのついた兜の中に表情を隠して追いつがる。剣は抜いてはいなかった。

私が川岸に着くと女はこちら側の土手を這い上つてくるところだつた。まだ若い、頬の赤い農夫の娘という感じだつた。顔立ちがっしりしていたが健やかな美しさがあつた。

私は泥にまみれた彼女の手を取り岸に引つ張り上げた。恐怖と疲労で女は私の足許に崩おれた。

二人の兵士もまた川にはいり迫ってくる。兜の庇の下の顔は自らの力を信じており、口髭には傲慢さがへばりついていていた。

「大の男が二人で若い娘を追い回すとは尋常ではないようだな」
兵士のひとり、幾分背が高く色黒の方が答えた。

「貴様は何者だ。見ない顔だな。我々をレドリュージュ男爵様に御仕えする者と知つての狼籍か」

兵士はどうやら余り言葉の使い方を知らないらしかつた。

「狼籍というのはおまえたちの今しているような行為を指すものと大方の人は言うだろうね」

「貴様、我々を愚弄する気か！」
もうひとりのやや幅の広い男の方が怒りに髭を震わせて言った。

ごつごつした手が短めの剣を抜いた。

背の高い方の兵士がもうひとりを制して言う。

「我々はレドリュージュ男爵様に御仕えする女を探しにこのギルベの村にやってきたのだ。そして目についたのがその女だ。男爵様からは報酬がたっぷりその女の家族には支払われることになっている。城で働くのは非常に名誉なことでもある。その女のために一番良いことなのだ。さあ、女をこちらに渡せ」

私は足許で震えている女に声をかけた。

「奴らにはあ言っているが、君はどうするつもりだ」

女は激しく首をふり泣き声を上げた。

「いや、いや、いや、お城になんて行かないわ、いやよ、殺される！いや、ああ、旅のお方、どうか私を……」

その後は涙に消えて聞き取れなかつた。

「というわけだ。この人は嫌がつている。帰つておまえたちの御主人に伝えるんだな。あなたの人望は領民の中では地に落ちていますとな」

今度は二人そろつて剣を抜いた。

「男爵様を愚弄する族は生かしてはおけぬ」

幅の広い男の剣がまず私の足を払おうとする。相手は二人だが土手の上にいる私には地の利があつた。奴の剣を避けて兜を思い切り蹴飛ばした。奴は土手の泥に足を取られて川に仰向けに漬かることになつた。

背の高い奴は私がもうひとりを相手にしている間に土手の上上がり右手から斬りかかつて来た。

蛇のような形の紋章が浮かびあがつた刃が突き出される。私は剣を抜いた。二振りの鋼鉄が噛み合い火花が散つた。鈍い陽光が刀身に反射する。

奴は力で私を押し切り、脳天に剣を振り下ろしてきた。私はすんでのところ奴の剣を避け、鎧の脇の隙間に深々と剣を突き刺した。口髭を血に染めて、兵士は倒れた。

休むまもなく、川から這い上がった男が襲いかかってくる。相棒の死骸にちらりと目をやり、怒りに顔を赤くして突っ込んで来た。

猛烈な突きをかわし、首筋に剣を振り下ろしたが、奴は意外な素早さで死をまぬがれた。奴の剣が私の灰色の外套を裂く。脇腹に鋭い痛みが走った。

「死ね！余所者め！」

口から白い息を吐いて、奴は剣を振りかざす。私は動きを読んで刃を逃れると、頭を打つと見せて、奴の腹に剣を突き通した。薄い革鎧を突き抜け、剣は奴の胃の中に納まった。

短い戦いは終わり、生きている人間は半分になった。

私は剣の血を拭うと鞘に納め、座り込んでいる娘の側によった。

「もう大丈夫だ。奴らは二度と起き上がれない」

「ああ、ありがとうございます、ああ……ありがとうございます、お城に連れて行かれたら……生きて帰っては来れませんでした……」

私はまだ震えている女に手を貸して立ち上がらせた。袖口と裾をしぼったこの地方の農夫たちの着る地味な服をまもっていたが、はだけた白い胴元には金の細い首飾りが下がっていた。赤く上気した頬にふと触れたくなかった。

「私は、エレーネと言います。ギルーベの村の村長の娘です。あの、よろしければ御名前を……」

「スナブ・ランケン。はるか西方、アニヤチから大洋を隔てたメルカーの都、サンジェリイから来た。当て所なく、旅をしている」

「サンジェリイ……聞いたことのない都です。よほど遠い所なのですね。私はアニヤチという所も知りません……」

エレーネの言葉はそこで途切れた。目が大きく見開かれ私の背後を見つめたまま動かない。口は叫ぶように開かれたが声は出なかった。

私の背後に氷のような冷たさを感じた。体の中にじかに突き刺さってくるような冷たさだった。剣に手をかけ振り向いた。

たった今斬り殺した二人の兵士の死骸が立っていた。痴呆のよう

に口をぼっかりと開け、空ろに目を見開いている。今死んだばかりだというのに顔はぞつとするような灰色になっていた。

二人の周りには白い霧のようなものが取り巻き、蛇のように蠢いている。それ自体、生きて意志があるもののようなのだ。

死んだ二人の口が動いた。だからだと血を吐きながら、かすれたおぞましい声で奴らはしゃべったのだ。

「ス……ナブ……ラン……ケ……ン……おまえの……名は覚え……ておく……」

死骸は声をそろえてそれだけ言うと、手にした剣をかざした。私は剣を握り直した。冷たい汗が吹き出る。

だが奴らは襲いかかつては来なかった。刀身の紋章が黄色く光ったかと思うと、奴らは自らの手で剣を首に押し当てた。異様にどす黒い血が噴水のように噴き出し、二つの首が落ちる。血ではないものもそこから噴き出していた。乳色と灰色が入り混じった、無数の蚯蚓がからみあつたようなもの。それは奴らの首からびくびくと震えながら飛び出し、宙に浮かび上がった。すると、二人にまといついていた白い霧がそのものを包み、灰色の雲の中へと凄まじい速さで昇って行つた。

二つの首無しの死骸が崩れると同時にエレーネの悲鳴が野原に響き渡つた。

ギルーベの村までは半刻ほどの距離だった。薄灰色の雲に覆われた空は次第に暗さを増していき、私たちの足は自然と速まっていった。エレーネは目撃した世にもおぞましい光景に唇を震わせながらも、事の経緯を物語ってくれた。

「レドリュージュ男爵様はこの地を代々総べているお城の（そう言うってエレーヌは北のたれこめた雲の方を見やった）城主様です。このあたりは決して豊かな土地とは言えませんが、代々の城主様は民人の事をよくお考えになつて善政を布いてこられました。村人は豊かとは言えなくても毎日の糧には困らぬ暮らしを続けてくる事が

出来ました。

「カールサ・レドリユー・ジュ様が二十九代のレドリユー・ジュ男爵様になられてから、黒雲が村を覆うようになったのです。男爵様は決して法外な税を課したり、無茶な法を作って村人を困らせたりするわけではないのですが……」

エレーネは両肩を自分の手で抱き、見えないものから身を守るような仕草をした。

「とんだ放蕩者というわけか」

私の言葉にエレーネは首を激しく振って否定の意をあらわした。

「初めは皆そう思っていました。これまでも村の若い娘を城主様が見染めてお城に上がらせる事もないわけではありませんでした。だから初めは皆そう思っていたのです。」

「カールサ様になってから初めてお城に上がった娘はデロクという美しい黒髪の娘でした。デロクがお城に行つてから一月後に村ではガラッド・ガロの祭りがありました。デロクの両親は当然、娘が帰つて来ると思つていましたが、城からの使いはデロクが熱病にかかつていたので帰れないという知らせを来ました。両親はたいそう心配してお城に行き、娘に会わせてほしいと頼みましたが、熱病がうつるといけなと言われ、すぐごと帰つて来ました。」

「何か月たつてもデロクがよくなつたという知らせは来ませんでした。今まではお城に上がった娘も二月に一度くらいは暇をいただいで村に帰つてくるのが習わしとなつていたので。」

「しかしデロクは帰つて来ませんでした。その年の冬に城から知らせが来ました。デロクが病で死んだという知らせです。両親は嘆き悲しみお城に行きましたが既にデロクの遺骸は埋葬された後で両親はついでに娘の姿を見る事は出来ませんでした。これが十五年前の出来ごとです」

毎年のように城に上がった娘は誰ひとりとして帰つて来る者はいなかった。ギルーベの村だけでなく近隣のエイシヤスやヴァオロの村からも何人もの娘が城に行き帰つて来なかった。城の門を潜つた

後、娘たちの姿を見た者は誰もいなかった。

エレーネの白い肌は城の話をしている内にますます白くなつていくようだった。

痩せた耕地の向こうに粗末な木の柵が見え、ギルーベの村に我々が到着した事を知らせた。当たり前には夕闇が迫り、村の家々からはぼんやりとした橙色の明りが漏れていた。

板で作られた十イート（約三メートル）程の高さの門は半ば開いてぎいぎいと不気味な音を立てていた。門扉にもたれかかっている者がいた。太陽は遠くの木立の向こうに姿を隠していたのでその人影は黒ずんだ固まりにしか見えない。

鶏がこんな時刻にもかかわらず、一声情ない声で鳴いた。

門衛は私たちに声をかけることはしなかった。彼には首がなかった。エレーネが引きつった短い悲鳴を上げた。

「死んでるさ」

私は慰めにもならない台詞を吐いた。

そいつは先刻私が斬り倒した男爵の手下の兵士の仲間らしかった。身につけている鎧も、胸に突き立てられて彼を門扉に礫にしている短い剣も川で鬪つた奴らと同じ物だった。

私たちは死人が番をする門から村に入った。

「男爵様に逆らつた私たちを懲らしめに来たのですわ……」

エレーネの言葉に私は少なからぬ驚きを感じた。彼女たちの頭には従うべき存在としてのレドリユー・ジュ男爵というものが刻み込まれているのだろう。

村の道は所々に松明が燃えていた。土が剥き出しの路面には荷馬車の轍の跡が深く刻まれており炎の明りに深い影をつくつていた。周りには板で作られた家々が並んでいる。

「動くな、首が飛ぶぞ」

背後で声がした。押し殺したひどく冷静な声だった。

「誰だい、あんた」

「まずおまえが名乗るんだ、両手は頭の上で組め」

私たちは言われた通りにした。声には研ぎ澄ました刃のような響きがあった。

「スナブ・ランケン。放浪の旅の者だ。こちらはエレーネ、この村の村長の娘だ」

「おお、エレーネ！無事だったか！」

しわがれた男の声と幾人かの安堵の溜め息、そして足音が聞こえた。

「お父様！」

エレーネは振り向き、声の主に走り寄った。

「僕も後ろを向いていいかい」

「よし、こつちを向け、手は下ろすな」

相変らず、冷たい声が言った。

五人ばかりの者が手に手にに得物を持って立っていた。ひとりりは白っぽい服をまとった背の低い男で、エレーネの肩を抱いて涙の対面をしている所だった。松明を手にした男がひとり。手斧と鎌を持った男が三人。村の住人だろう、慣れない仕事をしなくてすんだ安堵感が顔にはあった。

もうひとりはどう見ても農夫には見えなかった。尻までの革の鎧に身を包み、右手には細身の長剣を構えている。鎧の胸には黄と赤と紫で蘭のような花の模様が描かれていた。剣の鍔や柄頭にも花びらの大きな花を形どった美しい装飾がなされていた。かなりの伊達者らしい。

松明の炎に照らされたその顔はほっそりとしたどちらかといえど女性的な面立ちだったが小さな三角形の顎には強い意志が感じられた。黒い髪を後ろに撫でつけ、銀と緑の希石をちりばめた頭環で止めている。けちのつけようのない美男子だった。

「ナダル・ヤーク、その人が私を助けてくれたのよ。男爵様の兵士を二人も……」

ナダル・ヤークと呼ばれた剣士はちらりと村長の顔を見てうなずくと、剣を鞘に納めた。

「失礼した」

ひとこと言うとナダル・ヤークは村の暗い路地に姿を消した。

「本当にどうもありがとうございました。何と御礼を申してよいのやら……」

エレーネの父、ギルーベの村の長、リペイプは同じ台詞を四回言った。村で一番高級な酒場（後で知ったことだが村には酒場は三軒しかなかった）黒鴉亭には村長以下、重立った連中と警護の若者が詰め掛けて、狭い店をいっぱいにしていた。

リペイプと私の前にはディコンによく似たこの地方の酒が木の酒杯に入って用意されていた。一口飲むと独特の苦みがあったがそれなりにいけるものであることがわかった。

「いや、たまたま通りすがっただけのことですよ」

私はお決まりの台詞を吐き、酒を飲み干した。太った酒場の女将が酒杯を満たした。エレーネは既に休んでいた。

私は二杯目に口をつけながら、酒場に詰めた人々を見回した。どの顔にも笑みは見られない。はっきりしない不安と苛立ち、脅え、怒り、そういったものの影が彼らの顔を暗く彩っていた。

ただ、ひとりナダル・ヤークだけはそういった感情とは無縁の存在であるかのように、ひとり離れた卓で、杯を傾けていた。酒場の中は蝋燭と洋灯の光でかなり明るい。彼の容貌もその明るさに伴って輝いて見えた。

肌は白く、形良い唇は赤い。切れ長の目には深い影が宿り、灰緑色の瞳には消し難い何かの光があった。革鎧の下からは赤茶色の洋袴に包まれた足が柔らかい線を描いてのびていた。

私には男色の趣味はなかったが、この男の美貌には人をあやしい気持ちに駆り立てるものがあった。

村の入り口に礫になっていた兵士は、私が二人を殺したことの報復に来たらしかったが、ナダル・ヤークが村に入る前に斬り殺したという。腕の方もかなりのものらしかった。

「レドリユージュ男爵とは何者だ。私が斬った二人の兵士はまともな人間の死に方はしなかった」

村長は深い溜め息をつき、薄くなった頭を振った。

「はらわた男爵というのが今の男爵様の通り名です……」

リペイブはエレーネが話したことと同じ話を繰り返した。

「それが始まりでした。男爵様は年に一人二人、村の娘を連れ去って行きましたが誰ひとり帰って来た者はいませんでした。城にあげる娘の数は次第次第が増えていきました。城からの兵士は三月に一度は来るようになり、やがては毎月のように月の満ちる頃にやってくるようになりました。

「どこからともなく噂が立ち始めました。いわく、夜な夜な、城からは女の悲鳴が聞こえてくる。いわく、風が城の方から吹いてくるとき、血と腐った肉の臭いが混じっている、いわく、城壁から投げ捨てられた、血みどろの娘の死骸を見た者がいる……臭いに関しては噂は全くの真実でした。この私も城の風下の畑に出たとき、はつきりと幾度も臭いをかぎました。風の中にすえたような臭いがあるのです。死骸置き場からしか臭ってくるのではない腐った臭いが城から運ばれてくるのです。

「三年程前に、城に薬を納めに行った商人があるものを見て帰って来ました。商人は青く引きつった表情で村に戻り、私の家にやって来ました。そこで彼は偶然に見てしまったものを話しました。城の中庭には何本もの鋭い木の杭が立っており、その上に息絶えた、あるいはまだ恐ろしい苦痛に身悶えしている娘の体が串刺しになっていたというのです。娘の白い腹は大きく切り裂かれ、はらわたがこぼれ落ちていたと言います。彼はその世にも恐ろしい光景を城門に開いていた見張り用の戸口から覗き見てしまったというのです。商人は信頼出来る男でした。

「翌朝、城から兵士たちがやって来ました。彼が城から大事な宝を盗んだというのです。彼は漏衣だと主張しましたが、兵士たちは彼の言葉が終わらぬ内に彼の首をはね、腹を引き裂いて村の門に吊る

しました。

「はらわた男爵という名はその頃からこの近隣の村々でささやかれ出した名前です。男爵様の領地はこのギルーベではなく、オークラードやホシュトニク辺りまで及んでいます。今ではこの辺りで若い娘の姿を見つければ難しいくらいになってしまっているのです」

私がエレーネに出会って、しかも、はらわた男爵の手から救えたのはまさに神の思し召しというものらしい。

リペイブは側にいた男に声をかけ、鉄の鍵の掛かった木箱を持って来させた。鉄棒のついた一イート四方ばかりの箱を彼は卓の上に置き、鍵を開けた。

箱の中にはゲールガン金貨が数十枚納まっていた。

「仕事を引き受けてくださればまず二枚払いましょう。成功した暁には後八枚、あわせて十枚を支払います」

リペイブは灰色の瞳で私の顔を見据えた。酒場の中の人々はナダール・ヤークを除いては皆私に視線を向けていた。

「何をしろと言うのだ」

「男爵様を殺すのです。はらわた男爵を亡き者にさせていただきます」

ゲールガン金貨十枚というのはこのイオロープの地では向こう二年くらいは放蕩生活が出来るほどの価値がある。

「どの村でももう忍耐の限度は越しているだろう、力を合わせれば領主を倒すことも出来るようにも思えるが……これはあなたの方の問題だろう」

リペイブの顔つきはさらに険しくなった。

「二年前に決起した。だが、城門で、恐ろしいことがあった」

リペイブの右手は木箱の縁を握り、小刻みに震えていた。年のせいというわけではないようだった。

黒鴉亭の二階は宿になっており、小さな寝台以外には何も無い部

屋が五つばかり並んでいた。私はそのひとつを宛行われた。開け放した窓からは冷たい夜風と白っぽい月の光が入り込んでいた。

私は寝つかれず、緑青色の夜空に視線を迷わせていた。ギルーベの酒には余りたちの良くない酔い方をするものが含まれているらしく、胸の辺りがつかえるような感覚があった。

壊から二枚の金貨を取り出してみた。五角形の角は年月の内に擦れて丸みを帯びている。彫り込まれたルーヴェイゲルグ王の横顔は二枚とも別人のように見えた。どれが真実かなど誰も知らないしどうでもいいことだ。

廊下を忍んで歩く音がした。身の軽い、しかし忍び歩きなどには慣れていない者の足音、女のもののように思えた。隣室で扉がかすかにきしむ音がした。低い声でのやり取りが聞こえたが何を話しているかはわからない。だが、その声の一方はエレーネのものであるかのような気がした。

声はやがて、言葉にならないうめき声となり、肉の悦びに悶える声になっていった。寝台のきしむ音が聞こえる。

隣にはナダル・ヤークがいるはずだった。

からまりあう動物的な、二つの声は聞くほどにエレーネとナダル・ヤークのものであるように思えて来た。薄い壁越しに肌を合わせる、二人の姿が見えてくるような気がした。

月が傾き、夜空は鈍い青緑から黒ずんだ緑へと色合いを変えた。星々の光が目に見えてはつきりしてくる。

隣室の声はやんでいった。扉のきしむ音と廊下を忍び歩く音。

私は自室の扉の覗き窓から廊下を見た。暗い廊下を明りも持たずに歩く白っぽい人影が見えた。天窓から射している月光が一瞬人影に当たり、その首筋に金色の光が走った。訪問者は金の首飾りをしているらしかった。

翌朝早く、私たちはギルーベの村を発った。つまり、私とナダ

ル・ヤークの二人のことである。

彼は村長のリペイプがいかなる経路でか、オロンジーから呼び寄せた雇われ剣士だった。オロンジーと言えば、ギルーベの東方に位置する谷の奥の小村だったが、彼の姿や出で立ち、振舞いはずっと洗練されたものを感じさせた。

見送りに昨夜、黒鴉亭に集まった面々が大方来ていた。誰もがはつきりしない苛立ちと不安に満ちた顔つきをしていた。

私たちが使命を果たすことが出来るか心配しているというわけではないようだった。むしろ私たちを城に送り込むこと自体に不満があるように思えた。村人の中には実質的な恐怖と共に今だに男爵に對する服従者としての心が染み着いているのだった。

見送りにエレーネも来ていた。心なしか青い顔をした彼女の視線はナダル・ヤークにのみ向けられているように私には見えた。

私たちは馬に乗り、灰色の空の下を北に向かった。夕暮れ前には城に着くはずだった。

城からの使者を避けるために私たちは表街道を通らずに林の中を抜ける道を進んだ。木々の葉は秋を控えて、どこか腐ったような灰色の固まりに見えた。風はなかつたが周囲の空気は服の布地を通して、妙な冷たさを運んできた。

ナダル・ヤークは愉快な旅の友というわけではなかつたが、昨夜の印象ほどには無口というわけでもなく、ぼつりぼつりと話を交しながら私たちは進んだ。

「傭兵稼業というわけか」

「まあ、そんなものだ。これしか（と言って彼は腰の剣を叩いた）生きる術を知らないんでな。幸いなるかな、まだまだ、この辺りは争いごとには事欠かない。デモクス大王でも現われてイオロープを平定しない限り、食いぶちには困らないさ」

デモクス大王というのは東イオロープ一帯に伝わる伝説で、いつの日にか現われて全イオロープを統一する英雄である。しかし、いつ、彼がこの世に生を受けるのか伝える吟遊詩人はひとりもない

かった。

「はらわた男爵については何か知っていることはないのか」

ナダル・ヤークは額にしわを寄せ首を振った。そういった仕草がひとつひとつ絵になる。

「あんたと同じことしか知らない。正体不明の気狂い男爵様。黒い魔術にも長けているらしい」

冷静に考えれば、あまり割りの合う仕事とは言い兼ねるだろうことは私も気づいていた。

「なぜ、引き受けた。あんたはただの旅の者だろう。こんな村、さつさと通り過ぎてしまえばよかったのだ」

そういうナダル・ヤークの顔には幾分自嘲的とも思える笑みがあった。この男が笑うのを見たのは初めてだったが、もちろん彼の美貌はそこでも力を発揮していた。

「よくわからないね。ひとつには好奇心だろう。得体の知れないものは正体を見てみたくなる。運命というものもあるだろう。どうやら僕は行く先々で妖怪変化の類とことをかまえることを、腐るほどいる神々の誰かが決めていっているらしい。金も欲しいがね」

もうひとつの理由は言わなかった。私はこの美貌の剣士に興味を抱いていたのだ。

「あんたは？」

「御神託によつて選ばれたのさ」

ナダル・ヤークは髭のない顎に手をやって天を仰いだ。

「ホシュトニクにゼイという女占い師がいるんだそうだ。そのゼイ婆さんが男爵の暴虐をおさめるにはどうしたらいいかとガラッド・ガロにお伺いをたてたところ、オロンジーに神からその役を仰せ付かった剣士がいるという答えだった。ホシュトニクはともかく、ギルーベの連中はこの婆さんを余り信用していなかったらしいが、リパイブは半ば強引に話を進めて、私を雇った」

ナダル・ヤークの姿を見てみると、確かに神託によつて選ばれたというのもうなずけるような気はした。叙事詩の中から抜け出た神

の剣士というわけだ。どうやら私はそのお供として雇われたらしい。リパイブは神託を完全には信頼していないのだろうか。私がそのことを口に出すと、ナダル・ヤークは苦笑いした。

「何しろ、相手は尋常な人間ではないからな。いかに神の剣士とはいえ、ひとりでは危ないと思っていたんだろう。そこへあんたが現われた。娘を救つて二人の兵士を倒したというわけだ」

林はいつしか森へと変わり、私たちは純色の光が葉むらからさす、薄暗い小道を進んで行った。湿った匂いがあたりを取り巻く。枝の一本一本が、葉の一枚一枚が奇妙にくつきりと見え、足許を逃げて去つて行く虫の姿がひどく気味の悪いものに見えた。

突然、行く手に老婆が現われた。いつどこからやってきたのか、全くわからなかった。瞬きをして目を開くと、もうそこには立っていたのだ。

焦げ茶色の長衣を頭から被り、両の手首と胸には幾重にも腕輪や首飾りを巻きつけている。ただの石ころのような物から緑や赤の寶石、金銀の飾りまで様々な物が揺れていた。頭巾の下に半ば隠れている顔は樹皮を思わせる灰色で、信じ難いほど年を取っているように見えた。

老婆は右手に持った銀の杖で地面をついた。杖の頂部についた幾つもの輪や飾り物がじゃらじゃらと音を立てた。

「待つておつた」

老婆はよく響く声で言った。力強く、深い何かを感じさせる声だった。

「ゼイ……か」

ナダル・ヤークがかすれた声を出した。美しい横顔には狼狽とも見える表情が呼かんでいた。老婆の突然の出現に驚いたただけではないようだった。

「そうじゃ。私がホシュトニクのゼイじゃ。オロンジーのナダル・ヤークじゃな」

雇われ剣士は黙つてうなずき、馬から降りた。

「城へ行くのじゃな」

ナダル・ヤークは子供のようにならずいた。

ゼイは確かにある種の見えざる力を発しているように私にも思えたが、どうにもナダル・ヤークの反応には妙なものがあるように見えた。

頭巾の下に隠れ、そのまなざしは見えなかったが、老占い師が剣士を見つめているのがわかった。見えない何かが起こっているのだろうか。ナダル・ヤークの肩が震えていることに私は気づいた。

「これをおまえに授けよう。城できつと役に立つはずじゃ」

ゼイは壊から金色に光る腕輪を取り出した。細い金糸を網の目に織った物で、特別な織り方をした物らしく、光の当たり具合によって紅色がその表を彩った。

ナダル・ヤークは無言で腕輪を左手首にはめた。それは吸い着くように彼の腕に馴染んだ。

「必ずや、男爵を倒すのじゃ。これはおまえの役目じゃ。おまえにしか出来ん」

老婆は初めて私の方に頭を向けた。

「おまえは占いには出ない者じゃな。いかなト占として予期出来ぬものはある。じゃが……おまえは魅入られし者じゃな……力になつてくれるじやろうて」

最後の言葉はナダル・ヤークに向けて言ったものだった。

「気を付けてな……生きて戻ってくるのじゃ……生きて……」

ゼイは消えた。現われた時と同じように瞬時にその姿は見えなくなった。ナダル・ヤークの左腕に光る腕輪だけが彼女が今、存在していた証だった。

再び馬上の人となったナダル・ヤークの頬には涙が流れていた。

ナダル・ヤーク自身もその出来事について説明することは出来なかった。

「わからない。心のたがが外れて、何かを噴き出したように思え

た。だが、そいつが何なのかはわからない……」

剣士はそう言つて、腕輪を見つめた。何かを隠しているように見えなかった。彼自身にも不可解な何かが起こったのだろう。

陽が傾き始める頃、私たちは森を抜けた。

黄灰色の裸の土地がひろがっていた。なだらかな小さな丘が幾つか連なり、その向こうに城が見えた。村人たちの話だと、この辺りもかつては畑が広がっていたらしいが、今の男爵になつてからは次第に作物が取れなくなり、今は完全に放棄された土地だと言う。

所々に、灌木が思い出したようにねじれた枝を広げていたが、葉は一枚もなかった。散つて落ちるにはまだ早い季節だった。

空には鉛色の雲が無数のひだをつくつて連なり、そのひだとひだの合間から黄色味がかつた鈍い陽光がさしていた。

湿った風が城の方から吹いて来た。私は一瞬吐き気に襲われて、口を覆った。異様な悪臭だった。

暑い夏の死体置き場のような臭い。飛び回る蠅の羽音が聞こえてくるようだった。血と腐肉の臭い。

「男爵様は屠殺業でも営んでるのかね」

私の軽口に、ナダル・ヤークは答えなかった。切れ長の目を細めて、城を見つめていた。

「おい、どうするね。真つ昼間から面会を求めに行くか」

剣士は占い師にもらつた腕輪をなで、腕の前で拳を握り締めた。

「行こう、呼んでいる」

ナダル・ヤークは私の合意を求めることはせずに、一気に馬を走らせた。私は後を追つた。

「ナダル・ヤーク、いきなり御訪問は礼儀正しいやり方とは言えない。策を練ろう」

ナダル・ヤークは私の呼びかけを無視して、真つ直ぐ城へと馬を進める。

「ナダル・ヤーク！」

城は見る間に大きさを増していった。小高い丘の上にそびえるそ

の石の固まりは血塗られた墓標のように見える。悪臭がひどくなる。

さして大きな城ではない。所々崩れた城壁の上に、三つのずんぐりした尖塔が見える。六角錐の屋根や、城門の不格好な四つ足の怪物の彫像からして、数百年の年月を経ていることはわかった。

城壁の灰色の石積みには幾筋もの汚らしい黒ずんだ染みがついている。乾いてこびりついた血のようにも見えたが、これだけのおぞましい汚れをつけるには幾つの命が必要なのか、わかりはしなかった。

ナダル・ヤークは城門の目の前で馬を止めた。巨大な扉は表に鉄の板を打ちつけてあり、吹き出た赤錆は荒廃そのものだった。

「どうした、これはいくら何でも無茶と言うものだ」

ナダル・ヤークの顔には明らかに憑かれた表情があった。すでに彼は男爵の魔力に捕われているのだろうか。

「私を呼んでいるのだ」

もちろん、生身の耳には何も聞こえてはいない。心の内に響く妖術の声なのだろうか。私には何も伝わって来なかった。

はらわたに直に響くような重い音がした。城門がゆっくりと開いて行く。開いた細長い隙間から、じゅくじゅくした湿った空気が噴き出して来た。私は吐き気に襲われた。生臭い血と肉と腐敗の臭いが私たちを取り巻き、胃袋をひっくり返そうとする。

さらに門が開いた。内側の鉄柵がぎいぎいとときしみながら上にあがつて行くのが見えた。

その向こう、分厚い城壁がつくる迫持の向こう側に、恐怖があった。リペイブの話した、二年前に村人たちを蹴散らした恐怖がそこにあった。城門の内法は高さも幅も二十メートル（約六メートル）程あった。その空間をすべて埋め尽くす白い化け物がそこにいた。

その白い固まりが何であるのか、一目見ただけでは私には把握することは出来なかった。そいつが巨体をぎごちなく動かして、こちらに向かい出して初めて、そいつが悪意に満ちた人間の戯画化され

た姿をしていることに気づいた。

黒い蛇がからみあっている固まりに見えたものはその髪の毛だった。その下のぬるぬるとした物に覆われた凹凸のある固まりはどうやらそいつの顔らしい。赤く腫れ上がった盛り上がり二つに裂け、どろつとよだれが零れ落ちた。城門の中に納まるようにねじ曲げられた腕や足は関節がひとつ二つ余分についているようであり、異常な動き方をして、その巨体をこちらに押し遣っている。動く度に大きな肉の固まりがその胸で揺れた。この化け物は女（雌と言ふべきだろうか）なのだった。垣間見える股間の裂け目からは異常に肥大した赤黒い肉のひだがぶら下がっていた。頭以外の所には一本の毛もなく、肌は黄色味を帯びてまったく生氣というものが無い。

化け物は、体に比べて細い、人の背丈程もある指で顔らしき所を拭った。肉が崩れたような二つの穴はどうやら鼻孔らしく、とめどなく黄色い粘液を流している。黒ずんだ二つのしわのようなものが上下に裂けて、真っ赤に充血した目が現われた。焦げ茶色の瞳の中に私とナダル・ヤークの姿が映っているのが見えた。その漏れた瞳の奥にひとつの感情らしきものを見出し、私はさらなる恐怖に襲われた。

欲望の炎がその目の中に燃え盛っているように見えたのだ。

ずるずると、体を石壁にこすりつけながら、怪物は近づいて来た。よだれを垂れ流す口からはふいごのような息が漏れ、悪臭を放つ。

二年前に決起して、手に手に粗末な武器を持った二つの村の人々はこの怪物を目にして半分が逃げ帰った。残りの半分は勇気を振り絞って留まり闘おうとしたが、最初のひとりがむさぼり食われると、先に逃げた人々の後を追った。食われた男は手足を引き千切られ、一物から噛み砕かれていったとリペイブは話していた。

私は剣を抜いたが、こいつとどうやって闘えばいいのか知っていないわけではなかった。ふと見るとナダル・ヤークは剣を抜くわけ

もなく、平然と城門の中を見つめている。

「ナダル・ヤーク！」

美剣士は私の方を向き、曇った顔つきで言った。

「どうした、ランケン。まだ何も出てはいないぞ」

私は驚き、城門を指差した。

「あなたにはこの怪物が見えないのか」

「何を世迷事を言っている、行くぞ」

ナダル・ヤークは馬を進めた。

「目を覚ませ！ナダル・ヤーク！」

雇われ剣士は真っ直ぐ、化け物の壊へと入って行った。彼にはまったくこのおぞましいものが見えていないらしい。

怪物はよだれを撒き散らしながら、喉の奥で不愉快極まるうなりを上げ、剣士につかみかかった。汚らしい爪の伸びた巨大な指がナダル・ヤークの体をつかむかと思えたが、手は剣士の体をすりぬけて、宙をつかんだ。ナダル・ヤークはずぶずぶと怪物の肉塊に埋もれるように中に入って行く。

私は腰から短剣を引き抜くと、怪物の目を狙って投げつけた。短剣は正確に欲情に満ちたいやらしい瞳に命中した。だが、剣はそこに突き刺さりはず、何も障害がないかのように化け物の中に吸い込まれて行く。少しの間をおいて、剣が石の上に落ちるがちゃんという音が聞こえた。

私は剣を前に突き出し、思い切って馬を走らせた。心の中でこいつは幻なのだ、繰り返しながら。

馬は尻込みすることなく私の命に従った。この四つ足の獣の目の方が怪しもの惑わされることはないのかもしれない。

巨人の醜悪な姿が目の前に迫る。歪に腫れ上がった唇を長い真っ赤な舌がなめ回している。黄色い乱杭歯のぞき、頭がくらくらするようない臭いとその肉の裂け目から吹き出してくる。瞳が開ききつた目が私を見据える。体中に寒気が走る。

剣先が化け物に触れた瞬間、びりびりとした疼痛が腕から足の先

まで駆け抜けた。

だが、私の体は何の衝撃も感じないまま、化け物の体を突き抜けた。

そこはもう城の中庭だった。狭い円形の石畳の広場になっており、中央には噴水がつけられている。水桶を持った少女の像が立っている。元は大理石の透明感のある美しい白い肌をしていたのだろうが、いまそこにある物は自らの経血を浴びたかのように赤黒く汚れきつた物だった。水は出ていない。

庭の周囲は石壁に囲まれており、いずれも木の扉の閉まった迫持式の入り口が五つ並んでいた。正面には三つの塔がそびえたついで。高さはさほどないが露台や意味のわからない突き出しがついてごつごつとした外観を形作っている。

ナダル・ヤークは真正面の扉の前にたたずんでいた。ふらふらと馬を降り、扉に近づいて行く。

「ナダル・ヤーク！」

声をかけても振り向く気配はなかった。男爵の術中にはまっているのだろうか。

重い何かを引きずる音がした。振り向くと城門がひとりで閉じようとしている。私は馬首をめぐらせたが、鉄張りの門扉は誰の手も借りずに異様な速さで閉じた。黄色い荒地が細長い隙間から消え、見えなくなつた。化け物の姿はどこにもない。もはや私たちに残された選択ははらわた男爵のはらわたに食らい付くことのみのおぼろげだった。

中央の門扉が動いた。開いたわけではない。高さ十メートルもある重い木の扉がまるで鉛のようにぐにゃぐにゃと曲がり、ナダル・ヤークめがけて伸び出したのだ。

これは剣士の目にも見える出来ごとらしく、ナダル・ヤークの後ろ姿が驚きに立ち止まるのがわかった。ほっそりとした手が剣を抜こうとする。

だが、何かに魅せられた人のように彼の反応はそこで止まり、そ

のまま扉へと近づいて行く。

私は彼の名を呼んで時間を無駄にすることはしなかった。馬を飛び降り、雑草が顔を出している石畳の庭を駆け寄った。

ナダル・ヤークの肩をつかみ揺さ振る。彼は奇妙な光をたたえた灰緑色の瞳をこちらに向けた。

「ナダル・ヤーク！おまえは魔術に捕われているぞ！」

溶け出した扉は黄灰色の蛇のようになり、幾つもの頭をもたげて、近寄ってくる。その体の所々には太い締め具の頭や止め金が刺のように生えている。あちらこちらが伸びきった粘土のように千切れ、そこから黄色い粘液がにじみ出ている。むっとする腐った臭いがした。

溶けた扉が蝟の足のようになダル・ヤークにからみつく。彼は抵抗らしいそぶりも見せず、粘つく触腕にされるがままになっている。

私はナダル・ヤークの体をつかみ、強引に扉から引き離そうとした。剣士の艶やかな黒い髪が顔にふりかかった。扉の怪物の放つ腐敗臭の中に、私は甘い身をくすぐるような香りをかいだ気がした。

扉は黄色い粘つく網のように姿を変え、ナダル・ヤークばかりか、私の足にもからみついて来た。生きて蠢くそれは取り餅のよう一度張り付くと逃れることは困難だった。

引潮にさらわれる人のように私たちは溶解した木に縛られて、引きずられて行った。

扉はべとつく粘膜のような物になり私たちの体を覆って行く。腐った臭いがいつしか甘く心地好い香りに変わっていく。この匂いには一種の眠り薬のような力があるらしいことはわかったが、それに打ち勝つことが出来るわけではなかった。私とナダル・ヤークは網にかかった魚のように黄灰色の粘膜の中に包み込まれ、運ばれて行く。剣を抜こうという意識はあったが、体は言うことを聞かなかった。

ナダル・ヤークは私以上に意識が薄れているらしく、手足には全

く力がはいっていないようだった。暖かい体が押し付けられてくる。私は朦朧とした意識の中で、欲望が目覚めるのを感じた。触れんばかりに近くにある白い顔は余りに美しく、彼が男であるという事実はどこかに消え去っていく。もはや意識はほとんどないようで、瞳は半ば閉じられている。漏れた赤い唇の端から、よだれが一筋流れ出していく。甘い息の匂いがする。

だが、私は彼を女として見ているわけでもないのだった。ただ、目の前にはそういつた意識を越えた、求めたくなるものが存在しているのだった。

私は身をよじり唇を重ねようとした。明白な理性はなく、下半身の衝動が私を動かしていた。が、体は自由にはならなかった。唇が触れる寸前に目の前に闇が降り、私は淀んだ眠りの中に落ちて行った。

鈍い灰色の光がまぶたの隙間から差し込んで来た。目の前に灰色の膜が降りたように周囲の物がはつきり形をなさない。頭が重く、耳から鉛を流し込まれるとこんな気分なのでは、と妙な思いがよぎる。

二度三度頭をふると鉛は半分くらいになり、灰色の膜もだいぶ薄くなった気がした。

私が倒れているのは石作りの四角い小さな部屋だった。明り取りのごく小さな窓が高い場所に明けられており、そこから灰色じみた光が差し込んでいる。まだ陽は落ちてはいないらしい。一方の壁には扉があった。

天井の四隅には蜘蛛の巣が張り、床にも厚い埃が溜まっていた。壊れた木箱がひとつあり、干からびた鼠の死骸が転がっていた。

立ち上がると、足が多少ふらついたが、どうやら五体満足らしかった。剣も腰に吊るされたままだった。溶けた扉のかすのような黄色い物がわずかにこびりついている。

ナダル・ヤークの姿はなかった。

部屋の中の黴と埃の臭いの中にかすかに甘い香りが残っているような気がしたが、それがナダル・ヤークのものなのか、木の怪物の麻薬の臭いなのかはわかりはしなかった。

この城とナダル・ヤークには何らかの特別な関係があるらしい。彼は何度も、城に招かれていると言いつつ、奇妙な行動をとった。彼が魔術の類に弄されやすい人間だということも考えられないこともない。老占師の神託というのをどう考えればいいのかはわからない。が、はらわた男爵と雇われ剣士の間にはナダル・ヤーク自身も知らない何かがあるのは確かなことようだった。

私は奇妙な疎外感を感じ、苦笑した。この一件は私とは基本的に関係のないことであり、こんな石の中でのびている私は全く愚かな道化者のような気がしてきた。金が欲しかったわけではないし、名誉が欲しかったわけでもない。つまらぬ義侠心と好気心が私をこの奇怪な城の中に連れ込んだのだ。

サンジェリイを出てから今に至るまでの旅の途中で出会った奇怪な事件の数々が脳裏をよぎった。いずれも関わりなければそれで済みますことが出来たことだった。ゼイは私を魅入られし者だと言ったが、その重苦しい言葉は陳腐な喜劇の台詞のようにも思えた。

いずれにせよ、ここで朽ち果てるのは御免だった。私は慎重に扉の取っ手に触れた。じつとりとした感触に、またそれが動きだすのではないかという恐怖を感じたが、それは私の力意外では動くことはしなかった。

扉の向こうは狭い通路になっていた。左側は行き止まりで、右側にやや下り坂の廊下が続いていた。

松明はなかったが、歩いて行けるほどの明るさはあった。壁自体が不気味な赤みがかつた光を発しているのだ。

私は暗い通路を進んだ。足音は床や壁に吸い込まれていくようほとんど響かず消えていく。自分の息の音だけが伝わってくる。

通路はなだらかな下りで、右に左にくねりながら続いていた。三つ扉があったがいずれも鍵が閉まっており入ることは出来なかつ

た。人の気配もない。

下って行くに従って、通路は奇怪な様相を見せ始めた。切り出した石で組まれているように見えた壁や床は、いつしか幾重にもひだやしわの寄った正体不明の物に変わって行った。足許の固い感触も柔らかな物に変わって行き、生暖かい湿った空気が周囲を満たした。

壁から発する光は赤だけではなく、場所によって紫や黄色みを帯びた薄気味の悪い色相を帯びて来ていた。私は目に入った自分の手を見て、ぎよつとなつた。壁からの光を浴びたそれはまるで屍斑の浮いた死骸の手のように見えた。

通路は続いていた。この城自体が尋常な建物ではないことは明らかだった。通路は規則性を欠いたでたらめな曲がり方をしていった。壁はますます奇怪な姿になっていき、瘤状の物や何十匹もの蛇の固まりのような物がぶら下がっている所も目につき出した。

そして、どこからか低い太鼓のような音が聞こえてきた。腹の底をかすかに震わせるような低い鼓動がどこからか聞こえてくるのだ。

私の脳は巨大な生き物の体内に飲み込まれているという悪夢を産み出した。城は生きているのかもしれない。私はそのはらわたの中を蠢く一匹の虫けらなのだ。

いつのまにか歩調が速くなっていた。汗をかいている。小太鼓の音が入り始めたと思つたが、それは私の胸の鼓動だった。

闇雲に走り出したのか。周囲の壁が押し追ってくるように見える。遠い鼓動の音に合わせて、壁のしわやひだが脹らみ、縮み、蠢いているように見える。

手足が強ばり、思うように動かない。喉を何者かに圧迫されているかのように息苦しい。

私は絶叫した。恐怖の叫び声を上げた。足音を吸い込んでいたはずの廊下は悪意を持つかのようにその性質を変え、私の叫び声は反

響し、百倍にもなつて帰つて来た。

劍を抜いた。腕に異常な力がこもり、紫に光る壁に刃がめり込んだ。

水のいっぱい入った革袋に斬りつけたように、壁は裂けた。赤と黄色の入り混じった液体が噴き出してきた。腐った果実のような臭いが鼻をつく。汚水を浴びた部分の肌がひりつく。

私は狂気の叫び声を上げながら壁を斬り裂いた。黄色い飛沫が飛び散り目が半ば見えなくなる。壁がぼろ切れの集まりになつて行く。

ぶつんという音がした。劍先に手応えがあつた。

赤い液体を噴き散らしながら大きな白っぽい固まりがごろりと壁から出てきた。私は恐慌に襲われ、幾度も幾度もその物を突き刺し、斬りつけた。

それは床の上に長い四本の棒のような物を突出させてひっくり返つた。赤い水のような物が中央部の丸太のような物のまん中から噴き出している。赤い生暖かい液体が口の中に入ると塩辛い味がした。

ようやく私はそれがうつ伏せに横たわる裸の人間であることに気づいた。

劍を手から振り放そうとしたが指が強ばつて動かなかつた。

私は屈み込み、目眩に襲われながら、その動かない体をひっくり返した。ナダル・ヤークの顔が現われるのではと私は不安を抱いたが、血みどろのその死体は見知らぬ若い女だった。

女の臍からは臍の緒がのびていた。赤子のそのの何倍かの太さがあり、この通路と同じ物らしく赤と紫の斑状の色をしている。それは壁の真際で私の劍により断ち切られており、間欠的に赤と黄色の混ざり合った液体を噴き出していた。

狂気が頭から去り、私の心にはうつつて変わった静けさが訪れた。心の臓の鼓動がひどくゆっくりとなり今にも止まってしまうような気さえた。汗が冷えて行くのがわかる。

目の前に曝け出されている物を冷静に考えようとしたが、うまく頭が働かなかつた。この城は壁の中に女を孕んでいるというのか。

足許に横たわっているのは、明らかに人間の女だった。赤い血を流して冷たくなって行く。私は恐慌の中、罪のない人を殺してしまったのだらうか。

当然のように何の結論も出はしなかつた。

そのとき、斬り裂いた壁の向こうから音が漏れ聞こえてくることに私は気づいた。

壁の切れ目を両手で大きく押し広げた。分厚い肉片のような手触りの中に、女が納まっていた空洞があつた。無数のひだと細い管状の物がからまりあい、赤や黄白色の粘液が滴っている。その空洞の向こう側は壁がとても薄くなっているらしく、半ば透き通つて向こう側の明りらしきものが透けていた。

音は風のうなり声のようにも聞こえたし、また人の悶え苦しむ声のようにも聞こえた。低く柔らかい響きで聞こえてくる。

通路はまだ先へと続いていたが、もうこれ以上地下深く一本の道を降りて行くのはいやだった。私は壁の肉ひだを掻き分けて、中に入り込むと、劍を振り下ろした。薄い膜状の壁は簡単に裂けた。手で粘つく膜を引き裂き、向こう側に体を押し出した。

そこは円形の部屋だった。壁は通路と同じようなはらわたをよじり合わせたような気味の悪い物で、六イート置きくらいに白っぽい膜状の丸いふくらみがあつた。私が出てきたのはそのひとつだった。床は石板だったが半ばは壁と同じ不定形のぶよぶよとした物で覆われている。本来の姿を留めている部分には、どす黒い色で、大きな文字状の物が幾つも書かれていた。私にはまったく読めないひどく古びた絵文字のような物だった。ひとつの文字らしき物の大きさは五イート四方くらいはあつた。

部屋の中央には金属製の円形の台座のような物があり、十数本の脚で支えられている。その曲線的で、細かな彫り物がなされた意匠はイオロープの物というよりアニャチあたりの東方諸国の雰囲気がある。

あった。

台座の上には硝子の大小の管と、金属の円筒、それと壁をつくつている物と同じ、ぐにやぐにやとした袋状の物がからまりあった人の胴体ほどの大きな物が置かれていた。その得体の知れない物は、どうやら生きて何らかの働きをしている物らしく、硝子の管の中を青白い光が走ったり、袋状の物が脹らんだり縮んだりしている。

台座の下部からは何十本もの管がのびて、床の上をくねって壁につながっていた。

壁の白い膜状のふくらみのひとつがぶるぶると震えていることに私は気づいた。半球形のふくらみのまん中に、縦に一筋の赤い線が現われた。ふくらみは中からの力で動いている。

やがて、赤い線から朱色の液体がにじみでて滴り落ちた。ふくらみは左右に二つに裂けて行く。粘つく液体が流れ出し、その中から胎児のように身を丸めた女の白い肌が現われた。

女はぎごちなく手足を伸ばし、四つん這いの姿勢で床におりた。全身が赤や黄色の入り混じった粘液で覆われて、ぬらぬらと光っている。身動きすると大きな乳房が揺れ、粘つくものが滴り落ちた。

私はこの奇怪な誕生の瞬間に立ち会わせ、何をしたらいいかわからず立ち尽くしていた。城は女を産んでいる。赤子ではなく成熟した女を……目の前の現実には私はどう対処していいかわからなかった。この奇怪極まる場面をどう理解していいのか皆目わからなかった。

女はしばらく四つ足で自分の体を試すように手足を動かしていた。そして、立ち上がった。

均整のとれた体付きは十二分に魅力的であり、顔立ちも整い過ぎるくらいのものであった。長い黒髪が粘液に絡まっているさまが妙に煽情的だった。

彼女はまぶたを開いた。明るい茶色の瞳はこちらを見ていたが、そこには何も映っていないように感じられた。その顔立ち、体付き

は、ついさっき私が斬ってしまった女とよく似ていた。親子か姉妹のようによく似ていたが、微妙な雰囲気は異なっているようにも見えた。

女はほっそりした両の腕を突き出し、強ばった足の運びで私の方に歩いて来る。

細めた目にはやはり私の姿が映っているのだろうか。女の胸が大きく上下しているのが見える。鼻孔が大きく開いては窄まる。息が荒い。

私は女の表情に、城門の幻の怪物と共通する物を見出して、胸が悪くなった。色情に酔い痴れた淀んだ視線が私の体からみついてくる。

城門で巨人と対峙したとき以上の恐怖が襲った。剣で斬りつけられ、いや、素手で殴りつけてもこいつを倒すことは出来るはずだったが、私の足は尋常ならざる嫌悪感と恐怖感に引つ張られて、後ろへ動いていた。

女は首の座っていない赤子のように頭をぐらつかせて、歩み寄ってくる。暑い空気の中に女の匂いが漂ってくるような気がした。

私はきびすを返し逃げ出した。意味のない言葉を口走っていたような気もするが、そんなことは意識の内にはなかった。ただ、この狂気の場合から逃げ出したいだけだった。私は円形の部屋を走った。粘液が飛び散る音がする。女が追って来るのだろうか。

丸いふくらみ（城の子宮なのだろうか）が並ぶ中に一個所、黒い裂け目のような物が口を開けているのを私の目は見出した。そこが唯一の逃げ道だった。またあの果てることのない通路に戻る気にはなれなかった。

私は壁の裂け目に飛び込んだ。

私は悪夢のような選択をしたことを一目で理解した。通路の向こうで聞いた物音はこの部屋から聞こえてくるものだったのだ。

この部屋も前の部屋と基本的には同じようなつくりになっていた。円を描いた壁には丸いふくらみが幾つも並び、床の中央には得

体の知れない機械のような物が置かれている。だが、この部屋には腐敗と病根が宿っていた。

壁の子宮は白色の物はひとつもなく、生き腐った植物のような茶と緑の斑状の色、紫と青黒い斑点に覆われた物などが大半をしめていた。中にはぼつかりと口を開けたまま、灰色に干からびている物もある。

壁の肉質の物にもたれたような表面や、光を失った腐った色が広がっていた。

しかし、この部屋は死んでいるわけではなかった。台座の上の硝子の管や袋状の物には不規則に光が走ったり、動きを見せており、何らかの力が生きていることをあらわしていた。

そして、床の上には明確に生きているものが蠢いていた。この部屋の壁から座みだされたのであろう、生き物がいた。

私の数メートル前に座り込んでいるものは頭の三倍はあるかと思われる巨大な乳房を持つていた。その二つの肉の山に埋もれるような扁平な頭がのついていたが、顎から鎖骨にかけてが乳房とつながっており、その部分は肉が溶けてつながったように気味の悪い肉ひだのようなものに覆われている。手足は極端に細くまるで枯れ枝のようだったが、力はあるらしく、歪んだ体を引きずるようにして立ち上がった。

その後ろにいるものは膝まである男根をゆらゆらと揺らしながら、ひしゃげた頭を動かしている。巨大な一物があるにもかかわらず、腹の辺りには乳房が四つぶら下がっていた。そいつは左右で位置の違う赤い目を見開き、私を見つめている。膝の間で揺れる物がむくむくと頭をもたげ、皮の下から赤黒い亀頭が顔を出した。

台座の影にも何かがあるようだったが、飛び出しているその足と手は人間のそれというよりは蜘蛛のそれという方が近いように見えた。その周りにも幾つかの歪んだ影が見えている。

吐き気を催すおぞましい光景ではあったが、なぜか私は前の部屋で感じたような絶望的な恐怖というものには捕われずにはすんでい

た。剣を構えるだけの勇気があった。

天井からぶらんと人の頭ほどの固まりが降りてきた。何十匹もの蛇が固まったような気味の悪い灰色のものが台座の上で揺れている。それは斬り殺した城の兵士の首から飛び出して来たものとそっくりだった。そのものはうねうねとからみあいながら、形を幾通りにも変えている。一瞬、それは弾けるように大きく広がり、また球形に縮まった。

それが合図であったかのように奇形たちが襲いかかって来た。巨大な乳房の怪物は細い足でばったのように跳ねた。血走った目には殺意と淫欲がからまり燃えている。

私は剣を振り下ろした。剣先は巨大な乳房に食い込み、どす黒い血が噴き出す。乱杭歯を剥き出しにしてそいつは絶叫した。

どざりと床に転がるそいつの後ろからは、半陰陽の奴が迫ってくる。そそり立った一物はほとんど腹にくつついていた。黄色い長い爪が私の胸板を引き裂こうとのびてくる。

一撃を避けると、剣をそいつの四つの乳房のまん中に突き刺した。傷口からは血を、男根からは白濁した液をほとばらせて、そいつは床を転げ回った。

三番目の敵は足にからみついていた。冷たくざらりとした感触に総毛立ち振り向くと、足許には蛇がいた。手足は赤子のそれを干からびさせたような物がほんの申し訳程度についているだけであり、長い白い胴の後部、尻からは、三メートルほどの細い尻尾が生えている。だが、私の足にからみついているのはその尻尾ではない。こちらを見上げた妙に凹凸の少ない顔にぼつかり開いた赤い穴一口なのであろうーからのびている黒ずんだ桃色の長い舌が、私の足首に巻き付いているのだった。

まぶたのない丸い目の周囲には黄色い膿のような物がこびりつき、漏れた赤い目の中にはやはり気狂いじみた欲望の光がある。そいつが男か女かはわからなかったが、私を引きずり倒そうとしながらも、下腹部を床にこすりつけて快楽を得ようとしていた。

私はそいつの舌を一刀両断にすると、白い尻を踏みつけて、台座の上へ跳び乗った。剣の届く所に例の固まりがぶら下がり蠢いている。そいつがこの怪物どもを支配しているのは明らかに思われた。

台座の上の機械のような物を蹴飛ばし、床に落とす。硝子が砕け、光を発する黄緑や青の水が流れ出した。きな臭いにおいがする。

私は足場を確保すると、跳び上がって頭上の虫の固まりのような物に斬りつけようとした。

その腕が何者かにつかまれた。白いもやもやしたものも腕にからみついていて、強い力で引かれて、私は台座から転がり落ちた。

棒切れのような長い手が私の上に振り下ろされた。人のような肌の色をしていたが恐ろしくそれは固かった、先端には指が三本しかない虫と人の手が融合したものがついていた。

のしかかってくるそれはまさに蜘蛛と人間の合の子だった。手足は四本しかないが関節は異様な角度で折れ曲がり、二本足で立ち上がることは出来そうもなかった。こいつもまた異常に長い男根を持っており、ほとんどそれは胸元まで届いている。その先から白い液体が飛び出す。同時にそいつの口からも粘つくものが吐き出され、口もとで混ざり合ったものは白い粘つく取り餅のようなものとなって私に降りかかって来るのだった。そいつの頭には毛が一本もなく、額には第三の目と呼べるようなものがついていた。

蜘蛛の吐き出す糸が頭や胸の上に降ってくる。よだれと精液の混合物はその通りの臭いがした。胃が引きつっているのがわかる。固い棒のような手足に押えつけられ、奴の長い男根が私の腹にこすりつけられる。私はこの化け物に犯されるのではないかという恐怖に襲われた。

気狂いじみた力で私は自分の頭を奴の額にぶつけた。目の前に火花が散ったが、奴の額の目は潰れて、赤い血が噴き出した。手足の力が緩む。粘つく物を払い除けて、奴の腹を思い切り蹴飛ばした。奴の腹は薄い殻のような物で覆われているらしく、ぐしゃりという

気味の悪い音がした。

立ち上がると、蜘蛛男は潰れた腹を天井に向けて、もがいていた。奴の腹には何段もの節のような物がついており、潰れた所からは赤い血と黄色い体液が流れ出していた。男根からは白い物が滴り落ちていた。

蛇人間が床を這いずり蜘蛛男の上によじ登った。驚くべきことに斬られた舌の先は桃色の肉が盛り上がり、血も止まっている。蛇はその短くなった舌で、蜘蛛の腹から流れ出す液をなめ取った。長い男根にも舌をからませ、口にくわえた。蛇人間は身をよじり、二イトはあるその一物を喉の奥深く納めていく。じゆるじゆるという汚らしい何かをすすする音がして、蛇人間の長い白い喉が動いた。

蜘蛛男は死んでいるわけではなく、折れ曲がった手足をゆつくりと動かし、口を歪めて、かすれたうめき声をあげていた。よだれがだらだらと流れ落ちる。奴が断末間のうめきをあげているのか、快楽に酔った声をあげているのかはわかりはしなかった。恐らくはその両方なのだろう。

私は狂戦士のような叫びをあげて、からまりあう二人の怪物に襲いかかった。蜘蛛男の男根ごと、蛇人間の首を斬り落とした。噴水のように鮮血がほとばしる。黄色みを帯びた普通の人間が流すことのない物も噴き出す。

二回、三回と剣を振り下ろし、奴らの体を斬り刻んだ。腕が、胸が、返り血で真紅に染まっていく。骨がのぞく大きな傷が口を開けた蛇人間の胸を靴先で押し除け、まだ、のろのろと手足を動かしている蜘蛛男の首をはねた。棒のような足が真っ直ぐにのびたかと思うと、動かなくなった。私はその潰れた体を蹴飛ばした。

私は酔漢のように剣を振り回し、まだ台座の上に残っている機械装置を打ち壊した。火花が散り、硝子のかげらが飛び散り、頬に突き刺さった。白い煙をあげる液体が零れ落ち、台座の金属が溶け出す。鼻をつく臭いが漂ったが、気にはならなかった。

私はよろよると壁際に歩み寄り、壁の腐敗色をしたふくらみを方端から斬り裂いた。ほとんどの子宮にはどろどろに腐った汚物のような物しか入っていないかった。幾つかの中には床の上で無残なむくろを晒している化け物でさえまともに見えるようなものが入っていた。

足許がおぼつかなくなっていく。円い部屋がぐるぐると回っているように感じられた。天井から下がっている灰色の固まりが、ふくらみ、嘲け笑う人の顔のように形を変えているような気がする。耳には自分のたてる音しか聞こえていないのに、どこからか耳障りな笑い声が聞こえてくるような気がする。

何かに足を取られて、床に転んだ。仰向けに引っくり返ると、頭のすぐ側には大きく裂けた乳房があった。粘土に釘で無数の穴を開けたような肉ひだが目の前にある。異様に額が後退した顔は満たされない欲望を張り付けたままだ。開いた口から虫が這い出るように白っぽい舌がこぼれ落ちた。

立ち上がる気力と体力が失われて行くのを感じる。頭から血の気が失せていく。頭の芯が冷たくなっていく感じがする。

かすんできた視界の端に動く影があった。青黒い色をしたその影はまともな人間のような歩き方をして、こちらに近づいてくる。剣を握った手にはさつぱり力はいらない。

間近に来たそれは確かに今この部屋に横たわっているものたちに比べれば、はるかに正常な姿をしていたが、感じられるおぞましきから言えば似たようなものだった。

そいつはほっそりした体を黒に近い紺色の革の衣装に包んでいた。革の服は体にびったりとした物で、体の線をくつきりあらわしていた。彼―だろうか？―はひどくなで肩の女性的な体の線をして見たが、乳房のふくらみはなかった。革の衣装は股間の部分があらわになるようになっており、そこからは半ばから切断されたように見える男根がぶら下がっていた。それには細い銀の輪がはめられており、銀の鎖で首輪に繋がれていた。そのお陰でもうひとつのある

べき物も切り取られているのがよくわかった。

奴は細い首に幾本もの鞭を丸く輪にして下げており、腰帯にも鎖鞭を幾本も下げている。関節ひとつ分は長い指の生えている手に、その内のひとつを持っていた。

彼は顔のほとんどを覆う革の覆面をしており、細いが重そうな首輪をはめた首だけが白く浮き出て見えた。覆面の目の部分には穴が開いており、血走った瞳がのぞいている。瞳の色は革服と同じ青黒い奇妙な色合いだった。

宦官はめちやくちやになった部屋の様子を一通り調べるように見回し、壊された台座の上の機械の破片を幾つか手に取ってみた。そして、最後に余り興味もなさそうに私に視線を移した。

「おまえか、よくここまでたどり着いたな」

革服の男の声は女のように高く、覆面できえぎられてはつきりしなかったが、そう言っているように聞こえた。私はどう答えていいものかわからず、その気力もなかった。

「来るんだ。男爵様は観客を必要としている」

彼は私の答えを期待していた様子もなく、そう言った。どうやら、やつとこの城の主にお目にかかれるようだったが、私は起き上がる事が出来なかった。

「立て、おまえが必要になったのだ」

宦官の口調は木か石にでも命令しているかのようであり、私の反応にはほとんど気は配われていないようだった。奴は首に巻いた鞭を一本取ると警告なしで私を打った。

肌を斬り裂く痛みが肩から背中中に走り、私は二回ばかり床の上を転がった。

「立て」

言葉とほとんど同時に次の一撃が襲って来た。賞賛に値する鞭さばきで奴はそれを私の首に巻き付け、引つ張った。

瞬時に息がつまり、目玉が飛び出しそうな苦しさに私はよたよたと立ち上がった。虚弱そうな体つきとは裏腹に、奴は私を引きずり

立ち上がらせるだけの腕力をもっていた。

辛うじて剣は手に握っていたが、それを振う力がなかった。この部屋の空気自体に麻薬か何かが混じっていたのではないかと、ぼんやり考えたがわかりはしなかった。私は奴隷のように奇怪な革服の男に引きずられて行った。

円形の部屋には反対側にもうひとつの裂け目のような出入り口があった。その向こうは先刻私を通ってきたのとそっくりの通路になっており、私はしばらくそこを引つ張られて歩いた。

鞭の巻き付いた首のあたりが熱をもっているようであり、そこから新たなしびれが体に広がっていくような気がした。鞭には何かの薬液が塗りつけてあるのかもしれない。

どれくらい歩いたか、通路は終わり私たちはごく小さな部屋に入った。通路と同じように壁も床も弾力のある不定形のものに覆われている、床には放射状のしわのようなものが刻まれていた。それは足の下でゆつくりと盛り上がり、縮まり、動いていた。私は巨大な肛門の上に立っているような気がした。天井にも同じようなひだの集まりがあるようだった。

私の同行者は余分な口はきかず、また私に対して何の興味を持つ様子もなかった。小部屋に入ると彼は覆面の下で短い言葉をつぶやいた。床と天井がぶるぶる震えたかと思うと、天井のひだが大きく開いた。その中から私たち二人をすっぽり覆うほどの桃色の太い管があらわれた。肉の管は粘液を滴らせながら降りてくる。

私は叫び声を上げたかったが、管はその間を与えず私たちをその中に飲みこんだ。

生暖かく柔らかい感触が体を包んだ。文字通り生肉に包まれている感覚だった。目の前が真っ赤に染まって見える。ものすごい生臭さがあったが、それを気にしている余裕はなかった。

管は激しく膨張と収縮を繰り返して、私たちを上へと押し上げていく。足許から上へと体を絞り上げられていくようだった。

管の内壁から分泌する液体は肌をちりちりと焼かれるような感覚

をもたらした。長くこの管の中に入れば骨まで溶かされ、城の滋養分となってしまうのかもしれない。

唐突に私たちは管から吐き出された。管に吸い込まれたのと同じような小さな部屋だった。その床に開いた肉の穴から私たちは吐き出されたのだ。

私は床に転がっていたが、革服の宦官はそんなことにはおさまいなしだった。彼にはこんな移動の方法は階段の昇り降りと同じものなのだろう。奴は鞭を引つ張り私を引き起こした。

短い廊下を二度三度曲がると、狭いが天井は高い部屋へと出た。一方の壁は得体のしれないひだ状のものに覆われてはいたが、紛れもなく切り出した石でつくられた物であり、巨大な観音開きの扉がついていた。

扉は高さ七メートル（約五メートル）はあるように見え、錆びの浮きでた鉄の枠がついている。鏡板には、からみあう男女の姿がびっしりと浮き彫りとなってあらわされていた。無数の腕が、足が、乳房が、性器がうごめく毛虫のように一面を覆っていた。年月のせい、絵の具は剥げ落ち、色あせてはいはいたが、あちこちに往時を忍ばせる鮮やかな赤や朱、怪し気な紫の色などが残っている。尋常ではない毒を含んだ官能の世界が広がっていた。

「男爵様は待つておられる」

革服の男は私にわかる言葉でそう言った。この奇怪な扉の向こうにレドリュージュが、はらわた男爵がいるのだ。この狂気の生きた城の城主、カールサ・レドリュージュとは一体いかなる人物であるのだろうか。私は打ち続く怪異と恐怖と毒液に酩酊状態ではあったが、この扉の向こう側に隠されたものを思うと、いやおうなしに目を見開いて動き出した扉を見つめるのだった。

巨大な扉はごりごりという石が擦れる音をたてながら向こう側へと開いていった。

最初にその中から漏れて来たのは薄い黄白色の煙だった。腰の当たりの高さに霞のような卵色のものがたなびいてきた。

煙が目にはいった次の瞬間には鼻孔に新たな刺激が加えられた。むせ返るような甘く濃密な匂いが私の鼻の奥深く侵入し、脳髓に達した。その匂いは一口では言いあらわすことは出来ない。汗、唾液、涙、大小の汚物、吐瀉物、血、男の精、女陰から滴るもの、およそ人間から流されるすべてのものが入り混じり濃密に煮立てられたようだった。その上に得体の知れない甘い麻薬じみた香りが強過ぎる香辛料のようにからまり、言いようのないどろどろとした液汁のような匂いと化していた。

その匂いは朦朧としていた私の頭にさらなる一撃を加えた。黄白色の煙が大蛇のように鎌首をもたげて巻きついて来た。白い蛇の鱗の一枚一枚がはつきりと見え、ぼつくり開いた口から致死性の毒をしたたらせる長い牙がのぞいた。蛇は私の足に巻きつき、するするとのぼつてくる。鱗が男根をこすり、私はその異様な刺激に欲情を催した。蛇は私の胸板を身をくねらせながらのぼつてくる。掌ひとつの所にその顔がある。真紅の白子の瞳が光る。赤い蛇腹は血を満たした大皿のようだ。

血の一筋のような真つ赤な舌が不自然にゆつくり動き、私を幻惑する。なまめかしい白蛇は私の首へと滑らかな体を寄せてくる。蛇の舌が唇をなめる。蛇は私の口の中へ入ってくる。私は獲物を飲み込む蛇のように口を開ける。顎の骨がきしむ音が聞こえたような気がする。蛇は私の舌を押しつけ、喉の奥深く押し入ってくる。鱗が喉をこする。白蛇の尻尾が自分の口の中へ姿を消すのが見える。不思議と息苦しさはなく、異常な快楽が喉の奥から広がっていくようだった。

蛇が喉を下っていくのがわかる。舌が私の内側をなめながら胃へと降りていく。頭が胃の中へ到達し、胃液をすすっている。

脳髓が最初の衝撃から醒めるとこの奇怪極まる幻覚は薄れていったが、生き残った蛇の残滓は私の腸の中でのたうっていた。

扉は半ばまで開き、漂う煙の向こうにあるものが見えてきた。そこは天井の高いちよつとした広間のような部屋だった。太い円

柱が何本か立ち、そこに取り付けられた燭台と天井から下がる大きな飾り燭台が黄色っぽい光で部屋を照らしていた。人の手になる明りはこの城に入って初めて出会う物だった。あの不定形の肉質の物もそちこちの壁や床を覆い光を発してはおり、そのため広間には様々な色の淡い明りが重なり合つて古びた油絵のような色合いがすべてを彩っていた。

そこで目に飛び込んで来たものは扉に浮き彫りにされていたものと同じものだった。十数組の男女、あるいは男と男、女と女が肌をさらしてからみあつていた。床の上には台座のある部屋で見た物と同様な絵文字のような物が描かれている。乱雑に毛布や毛皮が敷かれていたがどれも皆ひどく汚れている。あちこちに黒ずんだ褐色や黄土色の汚れが見受けられた。

音は聞こえなかった。ゆつくりと腰を動かしている者たちもいはいしたが、大部分の者は体をつなげたまま、寝入っているらしく、部屋の中は沈黙が支配していた。

床のあちらこちらには、銀の皿が幾枚も散らかつており、ひどく汚ならしい残飯らしき物が見える。私にはそれが普通の肉や野菜の類の物にはどうしても見えなかった。

蠟燭の光のせいで黄色みを帯びて見える裸の人間たちの中には、あの部屋で見た怪物たちほどではないにせよ、どこかしら異常な肉体を持った者も混じっている。奥の方で口元から嘔吐物のかすを流しながら眠っている女の乳房は、やはり異常と思えるような大きさだったし、その手前で仰向けになつて女を股がらせたままゆつくり動いている男には、女陰に押し込まれている物とは別にもう一本長い男根が生えていた。また、私のすぐ足許でお互いの性器に口を押し当てたまま寝入っている者たちは、肌に細かい鱗のような物がついていた。

こうした異形の者たちに加えて、また異様とも思えるほど姿形の整った者たちもいた。二本の性器を持つ男とつながつて弱々しいあえぎ声をあげている女は、ほっそりとした手足に雪のような肌をし

ており、まるで硝子細工のような美しさの持ち主だった。

左手の柱の下で糞尿の中に転がっている男はクムロンジュの彫像のような彫りの深きをもった美丈夫であり、右手の柱の影で女どうしの楽しみに耽ったまま寝入っている者は浅黒い肌の気味の悪いくらい均整のとれた体つきをしていた。

その二人の女は体つきから顔つきまで双子のように瓜二つだった。

注意して見ると、よく似た姿をしているのはその一人だけではなく、何組もの者たちが明らかに血のつながりのあるような相似性をもっていた。大きな乳房の女は病に犯された部屋で斬ったあの女とどこかしら似たような顔つきをしているようにも思えた。

革服の男は先に立って歩き出した。周りに転がっている男女たちにはやはり何の関心もないようで、石ころでも避けるように彼らの体を避けて進んで行く。私は首を引つ張られて転ばずについて行くのに必死だった。幾度か白い手足を踏みつけてしまったが、彼らは何の反応も示さなかった。足元には大便や胃の内容物などがぶちまけられており、私は幾度もそれを踏みつけた。

広間の反対側の壁には扉があった。今入って来た物と比べれば、扉その物は小さかったが、その周囲には幾重にも装飾的な円柱や鴨居を取り囲み、それが重要な意味を持った扉であることを物語っていた。

柱は等身大の男女が立ち姿で交わっている物であり、剥げ落ちた金と桃色と赤の塗りが、かえって不可思議な艶やかさをもたらしている。扉自体は簡素な物で、どうやら元は金の漆塗りだったらしいが、ほとんど剥げ落ちていた。中央に女陰を形取った青銅の大きな取っ手がついていた。

私たちが前に立つと扉はひとりでに開き出した。女陰形の取っ手からは蜜のような赤みを帯びた液体が流れ出したが、それが何か意味を持っているのかはわかりはしなかった。扉は赤い液体を滴らせながら開いていった。

扉の向こうは暗黒だった。暗いと言うより黒いと言う方が正解だろう。何もない暗闇があった。

宦官は無言のまま私をそこへ引きずっていった。足がすくんだ。言いようのない恐怖に捕われ、理性より先に体が反応した。私は足を止め、その扉を越えないように踏ん張った。その黒い方形の空間には果てしない深みと冷たさがあるように思えた。

革服の男はその暗闇の中に立ってこちらを振り向いた。革の覆面から覗く青黒い目には何の感情も浮かんではいなかった。奴は私の首に巻き付けた鞭をぐいと引つ張った。

私の抵抗はそのひと引きで打ち砕かれ、私は頭から黒い空間に突っ込んだ。

千の刃物が体を斬り裂くような、痛みとも冷たさとも形容し難い感覚が全身を襲った。頭が一瞬で粉々に砕け、次の一瞬でまた元通りにつぎ合わされたような気がした。一呼吸の間に身も心も信じられないほど歪み、ねじ曲げられ、また強引に元に戻された。

暗黒は去り、私はもうひとつの広間に立っていた。

天井が高い。上へのびていく四角い空間に恐ろしい虚空が広がっていた。高さは七十メートル（約二十メートル）はあるように見える。天井は何本もの太い鉄の梁が交錯して、複雑な格子模様を織りなしていた。大小の四角い穴から白っぽい光が差し込んでいる。陽光のようにも思えたが、それにしても暖かみというものが感じられない光だった。梁からは幾本もの鎖や綱が下がっている。

四方の壁はすべて鉄板だった。継ぎ目には太い鉸が打ち込まれ、それが唯一の装飾と言つてよかつた。壁は油を塗つたように磨き上げられ、青黒い輝きを発していたが、床に近い方になると、何かの汚れが筋となってこびりつき、錆びの浮き出ている所も見受けられた。赤黒い飛沫、白つ茶けた斑状の物、灰色じみた染み、そういったものが人の背丈ほどのあたりまでを覆っている。床は灰色の四角い石がきつちりとはめ込まれていたが、その上を彩る物は壁と同じ汚痕だった。

部屋の中には三人の人間がいた。ひとりには部屋の中程の所に、天井から下がる鎖で縛られて吊るされていた。革鎧を身につけ、黒い髪を銀の頭環で束ねた美貌のその人はナダル・ヤーク以外の何者でもなかった。雇われ剣士は白いまぶたを閉じ、ゆらゆらと揺れている。爪先が時折床をこする。

もうひとりにはナダル・ヤークよりもやや奥の方に置かれた、鉄の寝台に縛り付けられていた。寝台と言っても柔らかい蒲団が敷いてあるわけではなく、鉄棒を組み合わせた横たわる者に苦痛を味合わせるために作られた物のようだった。その上に革紐のような物で縛り付けられている全裸の女がいた。血の気を失っているように全身が紙のように白く見える。唇も乳首も股間の亀裂も薄紫の染みのようにしか見えない。その青ざめた顔の女はエレーネだった。

今ひとりには男だった。広間の奥の壁際は床が一段高くなっており、その上に鉄の大きな玉座が置かれていた。鉄の棒と板で作られたその玉座は背もたれから放射状に先の尖った鉄棒が突き出ており、頂部には蛇のようにも鞭のようにも見えるものが身をくねらせている紋章が、灰色の輝きを放っていた。

玉座にはひとりの男が座っていた。

「男爵様、スナブ・ランケンを連れて参りました」

宦官が抑揚のない声で言った。

「ああ、そこにおいておけ。スウ・エック、おまえは……しばらくここにいろのだ」

玉座の主は張りのない退屈そうな声でそう答えた。

カールサ・レドリュージュ男爵は鉄の椅子から立ち上がりこちらに歩いてきた。彼は中肉中背のさえない顔形の男だった。

髪は短く切っていたが、手入れをしていないらしく、好き勝手な方向に立っている。白髪が幾らか混じっているがそんな年というわけでもなさそうだった。

額が出ており、頬骨が低い。鼻は幾分曲がっているように見えた。唇は薄い口元には締まりがなかった。耳がやや大きく飛び出

ているが目立つ。

しわのよった赤い絹の上衣と白い洋袴を身につけている。上着には金の飾り釦や銀の胸飾りがついていていたが、取れてしまった物もあるようだった。洋袴は薄汚れており、幾つも汚らしい染みがついていた。

スウ・エックと呼ばれた革服の男は私の首から鞭を解いた。私がかえって支えを取られたようになり、その場に膝をついて激しく咳込んだ。

「おまえが余分な客、余計な侵入者か。まあ、よい。私の兵士を殺しているから……幾らかは面白いものを持っている男だろう。これからいいものを見せてやるぞ」

私はすぐ近くまで来たレドリュージュの顔を見上げた。彼の肌は萎びた革のような褐色で、その肌に浅いしわを寄せるのが彼の笑い方らしかった。

「目を覚ませ、ギルーベのエレーネ、オロンジのナダル・ヤーク」

レドリュージュは熱のない声でぼそぼそと言った。鎖で吊るされた男と、鉄の寝台の上の女のまぶたはその瞬間に、機械仕掛けの人のように開いた。

エレーネはなかなか自分の置かれている状況を把握出来ないよううで、ぼうつとした顔つきでしきりに首を回して当たりを見まわそうとしている。意識を失ったまま、村からここへ運ばれて来たのだろう。

ナダル・ヤークもまた、この城のいたるところにあるらしい麻薬か何かの力に犯されているらしく、眠た気な目つきで、エレーネを、レドリュージュを、スウ・エックを、そして私の顔を見遣った。

「ランケン……エレーネ、エレーネ！」

村の娘の姿に視線が止まり、彼は叫んだが、声には力なく、ささやきのように聞こえた。

「レドリュージュ……何を……する気だ」

私の声も雇われ剣士のものときしたる差はなかった。

「私は退屈している」

彼はそうひとこと言うと言うと鉄の寝台に歩み寄り、エレーネの青ざめた肌をそろりと撫でた。エレーネの口からは脅えたうめきが漏れる。だがその表情はいまだ夢の中にいるようだった。

男爵は赤い上着の隠しからしわくちやになつた白い紙の袋を取り出した。その中から薄茶色の木の根のような固まりを出す。先端を指先で潰すと、その粉をエレーネの顔の上に振り舞いた。エレーネは小さく二度咳込み、その粉を吸い込んでしまった。

「貴様、何をエレーネに……」

ナダル・ヤークが鎖をきしませながら言った。

「何でもない。ただの薬だ。ごく弱い、媚薬のような物だ。意識は十分保てる」

レドリュージュはそう言いながらエレーネの側に腰を下ろし、萎びた革手袋のような手で彼女の乳房を握った。

レドリュージュは外見からは想像のつかない柔らかい手つきで、エレーネの白い乳房を撫で回し、もみしだいた。裾野から乳首に向けて搾るように手を動かし、乳頭に指を這わせる。男爵の手が動く度に血の気を失っていたエレーネの肌には赤みがさして来るようだった。

彼女はこの狼藉にも抵抗を見せることもなく、身を任せている。唇からは時折弱々しい声が漏れ出るが体はぐったりとしたまま、男のなすがままになつていた。

レドリュージュは薄い唇に笑いを浮かべて、ナダル・ヤークの方を見た。視線をこちらに向けたまま、その唇をエレーネの唇に重ねた。ナダル・ヤークは何も言わなかったが、鎖がじゃらじゃらと鳴り彼の怒りを代弁した。

はらわた男爵はエレーネのぼつてりとした唇を吸い上げ、灰色じみた舌でねちねちとなめ回す。色を失くしていた娘の唇は、刷毛で

色を塗られていくように鮮かな桃色を取り戻していく。男爵の手はその間も休むことなく乳房を包み込み、乳首をつまんでいる。

エレーネの白い肉がゆつくりとうねりを見せ、手足にも薔薇色が広がって行く。開いた鼻孔から甘い息が吐き出され、すつかり赤みを取り戻した唇は陵辱者の萎びた唇を求めようとうごめいた。

私の耳にもはつきりとエレーネの上げる悦びの声が届いた。男爵の奇怪な力か、麻薬の効果か、エレーネはレドリュージュの手下で欲情していた。

男爵は細い首の飛び出た喉仏をひくつかせて、嘲け笑った。

「この娘は欲しがっているぞ……恋人の目の前で、私のような化物の手に体を任せて、悦んでいるぞ……」

レドリュージュは灰色の膜がかかったような目を大きく見開き、ナダル・ヤークと私に毒を含んだ視線を注いだ。長い舌が黄色い歯の間からのびて、エレーネの柔らかい唇の中にねじ込まれる。舌をつたつて男爵のよだれがだらだらとエレーネの口の中へ流れ込んで行くのが見えた。

「止める！ 気狂いめ！ 止めるんだ！」

ナダル・ヤークはほとんど正常な意識を取り戻したらしく、大声で叫んだが、男爵の悦びを増しただけだった。

男爵はエレーネの口元からこぼれた彼女のよだれをていねいに舌先でなめ取り、そのまま舌を真つ白な喉に這わせていく。なめくじが這つた後のように唾液が光る。舌が乳首に到達するとエレーネは大きく快樂の声をあげ、体をのけぞらせた。すつかり固くなって飛び出している乳首をレドリュージュは舌を巻き付けるようになめ回した。同時に爪が食い込むまで乳房を握り締める。爪が柔肌を突き破り赤い血が流れ落ちていく。エレーネは短い叫びを続け様にあげ、革紐で縛られた体を激しくよじる。食い込んだ爪も彼女の内では快樂に転じているようだった。

レドリュージュはエレーネに木の根の薬を与えるとき、意識は保てると言っていた。それが真実であるならば、エレーネはナダル・

ヤークや私がいるということも十分認識したまま、レドリュージュの残忍な愛撫に悦びを感じているのだろうか。あの薬とは苦痛と恥辱を快楽に転化する効果でも持っているのかも知れなかった。「止める！止める！貴様を殺してやる！レドリュージュ、手をはなせ！」

男爵はむしゃぶりついてたエレーネの乳房から顔を上げるとナダル・ヤークに向かって長い舌を突き出して見せた。この滑稽とも取れる仕草は際立った異常な姿に私には思えた。

「見ろ、おまえの恋人は私の愛撫に応えているぞ。見ろ、この唇を。私の舌を求めて捲れあがっている。見ろ、この乳房を。こんなに固く張りつめている。今にも弾けそうだが」

レドリュージュはそう言い放ち、エレーネの右の乳首を強く吸った。エレーネの白い腹がひくつくのがわかる。

レドリュージュは一旦身を起こすと、エレーネの足の自由を奪っている革紐を解き出した。革紐は両足を閉じた格好で鉄の寝台に縛りつけている。

「何をやる気だ！止める！止めるんだ！」

ナダル・ヤークは叫び、激しく体を揺すったが、鎖がぶつかり合う鉄の音が大きく鉄の壁に反響しただけだった。

革紐は解けた。エレーネは足に力が入らないかのように軽く膝を開いた。股間の茂みから淡い色の亀裂がのぞく。

「さあ、私に身を任せるか。私におまえのあそこをいじりたいか……淫らな牝よ」

エレーネは言葉にならないうめき声で返答した。大きく口を開けて、獣じみた声を発しながら、彼女は自ら両足を開いていった。

「エレーネ！エレーネ！目をさませ！おまえは気狂いの魔術にかかっている！目をさますんだ！」

ナダル・ヤークの悲鳴に近いような声が部屋中に響き渡る。エレーネはその声に応じるかのように一瞬足の動きを止めた。顔を動かしてナダル・ヤークの方を見たようにも思えた。が、その上気し

た顔は淫らな欲望以外のものはあらわしてはいなかった。喉を鳴らすような声を発すると彼女は白い太股を大きく開いた。あらわになった秘唇は欲情しきって赤らみ、ぬらぬらと蜜をしたたらせていた。女の匂いが漂ってくる。

男爵は額に汗を浮かべて、上目使いでこちらを見、嘲りと異常な興奮に満ちた笑みをつくった。舌をエレーネの肌の上に這わせながら、彼は姿勢を変えていき、大きく開いたエレーネの股間へと顔を寄せていく。

エレーネの肌をしゃぶりながら、男爵は喋った。

「見ろ。よく、見るんだ。この牝はこういう存在だ。心底からこういうことが好きなんだ。欲望の奴隷だ。淫らな牝だ……は、ははは……」

男爵は声をあげて笑った。こんな耳障りな笑いというものは聞いたことがなかった。

私はまだ右手に剣を握っていることに気づいた。私の右手にはまだ、人を斬り裂き、命を奪うことの出来る道具があったのだ。私の心の内には不思議と男爵に対する怒りの気持ちが出ていなかった。それ以外の感情もほとんど何もないような気がした。城で体験した幾つもの異常なことが私の心から何かを奪ってしまったのかもしれない。

だが、男爵の笑いは不愉快だった。極めて不快な、苛立ちを覚えるものに満ちていた。私の体にはどうにか剣を振り上げられる力が戻ってきた。

私は鉄の寝台へと走った。ナダル・ヤークの脇を走り抜け、剣を振りかざして、疾風のようにレドリュージュに迫る。自分の足音が銅鑼でも鳴らしたように部屋に響き渡るのが聞こえた。

レドリュージュが三イート（約一メートル）の所にいる。萎びたような薄茶色の肌に浮いた汗の玉が生理的な不快感をもたらす。剣を持つ手に力が加わった。

奴は恐怖は見せない。ごく軽い驚きが灰色の瞳に見られるだけ

だ。彼の下のエレーネの肌が揺れる。豊かな乳房は幾つも幾つもレドリュージュに吸われた赤い痕を残している。固く尖った乳首が天井を向いている。目を閉じた恍惚の表情。

「スナブ・ランケン、気をつけろ！」

ナダル・ヤークが声を張り上げる。

振り上げた剣に何かがからみついた。強い力で後ろに引つ張られて、私は仰向けに倒れた。ひどく尻を打ち、足に力が入らない。逆さまに宦官の姿が目に入った。スウ・エックの長い鞭が私の剣にからみついていた。

去勢された男は私に近づくと首に巻いていた鞭の一本を左手に握った。短い空気を裂く音がして、胸板に信じ難い痛みが走った。

服が裂け、皮膚が裂け、肉が裂けた。見る見る内に真つ赤な血が溢れ出していく。痛みというより熱さが広がって行く。

レドリュージュはいやらしく動く舌で、エレーネのひなさきをつつきながら言った。

「スウ・エック、それにヴォクサをかけてやれ」

革服の男は腰に下げた小袋から、小さな薬包を取り出した。真つ白い紙を広げると、かすかに青みを帯びた白い粉を私の傷口の上に振り撒いた。粉はわずかに顔の方にもかかり、かすかだが刺すような臭いが鼻を刺激した。

魔術にかかったかのように傷の痛みがひいていった。胸の傷も強く打った尻からも痛みが消えていく。同時に他の感覚もまた失われていくようだった。自分の胸が、腰がどこにあるかがわからなくなっていく。足を動かそうとしてもそれにはどうすればいいのかわからなかった。体はどこか遠い所へ旅立ってしまった。私は生きて存在していたが、私の肉体という物は目には見えていても存在していないかのようだった。

男爵はエレーネの女陰に長い指を押し込んで引き抜いた。泥の上を歩く靴音のような音がする。溢れ出した蜜が鉄の寝台にしたたり落ちている。

レドリュージュは私とナダル・ヤークの顔を交互に見て、目を細めて笑った。エレーネは何かに取り憑かれたように腰をくねらせ、男爵の手と舌の動きに応え、淫らな声を上げ続けた。私は芝居小屋の観客のようにそれを見続けた。手の届かない舞台の上で劇は進んでいくのだ。

レドリュージュはひとしきりエレーネに悶え声を出させると急に表情を変えた。いやらしい笑いは消え、目に宿っていた光も失せた。手も舌も動かすのを止めればしの間、エレーネの肉に顔を埋めたまま突つ伏していた。エレーネは男爵の愛撫が止まったことに気づかないかのように、ひとり、身をくねらせて、快樂の海に漂い続けている。

男爵は急に立ち上がると、エレーネを縛りつけている革紐を解いた。夢見心地のエレーネを引きずり、玉座に腰を下ろす。村長の娘を自分の膝の上に座らせると、背後から、乳房をもみしだき、股間に指を這わせた。

エレーネはこの新しい刺激に激しく反応した。男爵の指が淫裂に出入りする度に白い喉をよだれが流れ落ち、生臭い声が鉄の壁の間にこびりました。

レドリュージュは女の乳房に這わせていた手を引つ込め、懐に入れて、何事かしていた。再びあらわれた手の爪には濃い紫色の絵の具のようなものがついていていた。

男爵はエレーネの喉元から下腹まで、爪を立てて指を動かした。細い紫の線が彼女の体のまん中に描かれていく。

城の主はひどくつまらなそうな顔つきで、エレーネの愛撫をまた始めた。エレーネは何も気づかず、荒い息を吐き続けている。白い太股が踏みつけられた蛙の足のようにひくひくとうごめき、快樂の絶頂を迎えようとしているのがわかる。

私もナダル・ヤークも、無言のまま、その様を見つめていた。とりあえず、私たちに出来ることは何もなかった。ナダル・ヤークの胸の中には何が去来しているだろうか。彼の美しい顔は青ざめ、食

い入るように恋人が飛ばれている鉄の玉座を見つめている。

エレーネの体には玉の汗が浮かび、桃色の唇は男を求めぬ卑猥な、言葉を口走っている。身悶えする度に紫の線がねじ曲がり、淫らな踊りを踊った。その線の動きを見つめているだけで、彼女の体を吹き荒れている悦楽の嵐が読み取れるようだった。紫の一本の線がとてつもなく淫らな物に見えた。

その線上にぼつぼつと赤い玉があらわれた。ごく小さな点のように見えたその赤い玉はエレーネが体を波打たせてあえぎ声を上げる度に大きくなり、汗と混じり合って流れ落ちた。

血の雫だった。

肌に描かれた紫の線にそって血の雫が浮かび出し、たらたらと流れ落ちていくのだ。

エレーネの声と動きはますます激しくなり、ほとんど狂乱の呈を示し出した。それに連れて、噴き出る血もまた多くなつていき、エレーネの白い肌を赤く染めていく。レドリュージュの手はその血をすくい取るように弾む乳房に、開き来った女陰に、塗りつけていく。それはまた汗と混じり合って流れ落ち、女の肌に奇怪な絵模様を描いていく。

男爵は、女の腹の今や赤い線となった所に、もう一度爪を立て、上下に指を走らせた。

音をたてて、エレーネの腹は裂けた。

鮮血がほとぼしる。十イート（約三メートル）離れた鉄の寝台にまでそれは届き、灰色の鉄枠を赤く染める。

エレーネは自分の腹が裂けたことにも気づかないように口を大きく開き、舌を突き出して、淫らな声を上げ続けている。聞こえる悲痛な絶叫はナダル・ヤークの喉から発されたものだった。

男爵は朱に染まった両手でエレーネの体を廻り続ける。エレーネが身悶えする度に二つに裂けた腹からは血が噴き出し、真っ赤なはらわたが顔を覗かせる。レドリュージュは腹の裂け目に両手を突っ込むと、勢いよく左右に引き裂いた。

この凄まじい所行がエレーネの体内でいかなる転化をしたものかはわかりはしなかったが、血みどろの女は喉元まで肌を裂かれたとき、大きく体をのけぞらせて、喜悅の叫びを上げたのだった。

大きくなった裂け目からは血と一緒にはらわたが飛び出してくる。幾重にも折れ曲がった腸が、玉座の下にこぼれ落ちる。レドリュージュの奇怪な力はあばらまでを断ち切っており、胸の奥からは肺臓らしき物が顔をだす。

男爵の、返り血を浴びて赤鬼と化した顔には、悦びの表情といったものは浮かんではいなかった。気狂いじみた笑みや、異常な興奮に満ちた目の光といったものはそこにはなかった。鉄の壁の向こうの漆黒の闇をその灰色の瞳は見ている。私はその視線に恐怖を覚えた。

レドリュージュは熱意のない、しかし確かな手つきで、エレーネのはらわたを掻き回した。胃を撫でまわし、脾臓に優しい愛撫を加え、引きずり出した肝臓にくちづけた。エレーネは体を二つに裂かれているにもかかわらず、男爵の手の動きに応え、口から血の泡を噴きながら悦びの声を上げていた。赤い泡は喉をしたたり落ちて、胸から舌を染める真紅の絵模様と合流する。

男爵は徐々に勢いを強めて、エレーネのはらわたをまさぐる。萎びた手は握り締めた子宮を引き裂き、かけらを床の上にはらまく。エレーネの女陰には引き千切られた彼女の腸が突っ込まれ、ひくひくと断末間の蛇のように短い周期でけいれんを繰り返している。男爵の手は解体された女の乳房を裏側からもみ潰し、それは悪疫に犯された死骸のように潰れて真っ赤な腐った果汁を滴らせる。

もはやエレーネの体内にはほとんど臓器が残っていない。腸は股間からぶら下がり、胃の腑や肝の臓は床の上に投げ出され、玉座の周りは屠殺場の有様だった。

だが、エレーネは死んではいなかった。レドリュージュの指が剥き出しになった背骨を撫でると、その動きにあわせて細い声でうめき、男爵の膝にのせた尻を蠢かすのだった。

私もナダル・ヤークもはや何も言うことはなかった。ただ、眼前で起こっている狂気を見続けることしか出来はしなかった。

男爵はエレーネの肋骨の中を手探りして、拳大の物を引っ張り出した。

それは生きて鼓動を繰り返しているエレーネの心臓だった。

レドリュージュは淀んだ目つきで、びくびくと蠢いているその肉の固まりを見つめた。唇がねじ曲げられ、ひどく不愉快そうだった。エレーネは心の臓を握られながらも息絶えることはなく、白眼を向いて、究極の快楽に酔い痴れている。

はらわた男爵は心臓から出ている太い血管を爪を立てて切断した。噴水のように血が噴き出て、ナダル・ヤークと私にも赤い飛沫が降りかかる。エレーネの血は、暖かく塩辛い味がする生身の人間の血だった。

レドリュージュはもはや無意味となった鼓動を続けるエレーネの心臓を果物でもむくように両手で引き裂き、千切つていった。分厚い肉片を床石の上に投げつける。玉座の周りは文字通り血の海と化しており、引き千切られた心臓のかからは床に溜まった血をはね散らかした。

男爵は子供が遊び飽きた玩具を捨てるように、エレーネの体の残骸を床に投げ捨てた。自らの血とはらわたの中に美しい顔を埋めて、エレーネは死んだ。尻の肉が、時折、引きつったようにまだ動いていた。

「つまらないことだ」

レドリュージュは空ろな目つきで、床の上に散らばっている物を見渡した。白い洋袴はどす黒い血に染まり、上衣はさらに赤みをままして、血の雫が裾から滴っている。

「ナダル・ヤーク、どうか。おまえの最愛の女の死にざまは。彼女は素晴らしい快楽の内に死んで行ったぞ。はらわたをまさぐられながら幾度も幾度も絶頂を迎えて、獣のように悶えていたな」

ナダル・ヤークの返事はなかった。彼はただ、凄まじい目つきで

レドリュージュを見つめているだけだった。

「おまえがいつかは来ると思っていた。私はくだらぬ神々の予言など信じているわけではない。おまえは血に引きずられてここに帰って来たのだ」

男爵はゆつくりとナダル・ヤークに歩み寄って行った。一歩歩く度に靴の中に溜まったエレーネの血がぶしゅぶしゅと音をたて、真つ赤な足跡が残されていく。

「エレーネは本当におまえを愛していたか。おまえは私と同じ化け者の一員だ。エレーネとは寝たか」

ナダル・ヤークは白くなるほど唇をかみしめ、体を震わせていた。真つ赤になつた目からは涙が流れ落ちていく。

「エレーネは……私を受け入れてくれた……貴様……貴様は何者だ。何を知っている」

「すべてだ」

レドリュージュは口元に薄笑いを浮かべたが、灰色の目にはどぶの水のような色合いしかなかった。

「私はすべてを知っている」

男爵はナダル・ヤークの前に立つと、壊から金の柄のついた短刀を取り出した。磨き上げられた刀身が天井からの光を反射して、ナダル・ヤークの頬に光の斑をつくる。

「そこにいる奴。スナブ・ランケンとか言ったな。おまえは見ただろ。この城の中で行なわれていることを……私は快楽を追及している。それを提供するものを自らつくっているのだ」

短刀をナダル・ヤークの胸元に突き付ける。彼の白い喉元に刃を軽く押し当てる。血が一筋刀身を流れていく。

「この城は人をつくる事が出来る。大いなる厄災がこの世をみまう以前の遺産だ。村の娘たちを使って、幾通りもの女や男をつくる事が出来る。神の如く美しい物にも、化け物にも出来る。私は十五年前にその秘密を発見した。そして今日まで、城を育ててきたのだ」

男爵の短剣が閃いた。私は体中に熱いものが駆け巡るのを感じた。飛び出して行って気狂い男爵を斬り殺したかったが、体は動かなかった。狂おしい衝動だけが体の中をかきまわした。

「ナダル・ヤーク、おまえをつくったのは私だ。おまえははらわた男爵、カールサ・レドリュージュの子なのだ」

ナダル・ヤークは小刻みに体を震わせ、父と名乗った悪鬼を見つめた。額に汗が噴き出して、流れていく。

「嘘だと言えるか。言えまい。おまえは心の深奥の部分でそれをわかつていたのだ。だから、惹かれるようにここに来た」

ナダル・ヤークはうなずいた。男爵の妖術に陥っているのか、本当に彼がそう思っているのかは私にはわからなかった。レドリュージュは短刀でナダル・ヤークの革鎧の止め金と紐の部分を裂いていく。蟹の甲羅でもはがすように鎧を取りはずした。鎧の下の灰色の上衣は、胸の部分が脹らんでいるように見える。布地がだぶついているだけにも見えたが、形あるものが下から盛り上げているようにも見えた。

「おまえは私のつくりあげた最高傑作になるはずだった。たつぷりと私に悦びを与えてくれるはずだった」

男爵はナダル・ヤークの衿元をしぼっている紐をゆつくりと解きにかかった。

「止めろ……止めろ……」

ナダル・ヤークのかすれた声が聞こえる。額にしわを寄せ強ばった表情で彼はそうささやいていた。

「おまえは私がホシュトニクから連れて来た娘と私との間に出来た子供だ。私の慰みものとなるために生まれてきた子供だ。その女はこれまで城に連れてきた女たちの中でも際立って美しい娘だった。私は持てる力をすべて注ぎ込んで傑作をつくったつもりだった」

紐は解け、白い胸元があらわになる。私の中を衝動が走る。だが、それはナダル・ヤークを救い出したというものではなく、彼

(?)を我が物としたい欲情に相違なかった。

「月満ちぬ内に私は女の腹を裂き、おまえを取り出した。そして城の子宮に入れ、様々な薬液や雷の力を加えた。おまえは十年前に生まれた。十才の子供の姿でな」

「嘘だ！貴様は……」

ナダル・ヤークが叫ぶと同時に男爵は灰色の上衣を一気に引き裂いた。

小ぶりだがきれいに形の整った乳房があらわれた。淡い桃色の乳首が震えていた。

「嘘ではない。消された記憶がよみがえってくるはずだ。誰にも脳髓に刻まれたものを完全に消し去ることなど出来はしない、我が子よ」

レドリュージュはナダル・ヤークの乳房に両の掌を押し当て、きゅつと握った。

「嘘ではない。おまえが自分でよく知っているはずだ。おまえの体がそれを物語っているのだ」

男爵は吊るされている剣士の腰帯を切った。洋袴が裂かれ、白い足が剥き出しになる。下帯が食い込んだ尻は少女のような引き締まった曲線を描いている。

「止めろ……嘘だ……止めてくれ……」

男爵はナダル・ヤークの下帯に短刀を当てた。汗で湿った白い布はすぐには切れなかった。

「母を生かしておいたのが間違いだ。その方が色々と楽しめると思ったのだが……意外に強い女だったのだ。おまえの母はおまえを連れて城を抜け出した。私は少しばかり、フェロン・カーの葉をやり過ぎて気がつかなかった。何たる不覚、私は生涯最高の傑作をみすみす失ってしまった。だが、おまえはこうして帰って来た」

下帯が切れ、ナダル・ヤークの下半身を覆う物はなくなつた。彼の股間には幾分小さいが、明らかに男根としか言いようのない物がついていた。

「見ろ、自分の体を。見ろ、この柔らかい乳房を。見ろ、おまえの槍を……おまえは私に快楽を味合わせるために生まれてきたものだ。おまえは私の作品、私の玩具、私の家畜なのだよ」

ナダル・ヤークの喉からは言葉にならない嗚咽が聞こえてきた。頬を涙が流れている。鼻水が唇に流れ落ちて、ぬらぬらとした光を与えていた。私は自分の一物が固くなつていくのを感じた。

レドリュージュは私の方を振り向き、薄い唇を捲り上げるようにして笑った。

「見ろ。私の傑作を。十年の間にこんなに育つて帰つて来た。見ろ。……ふふ、おまえは欲情しているな。これが欲しいだろう。こいつが抱きたいだろう……」

男爵はナダル・ヤークの男根をつかみ、思い切り上にひっぱり上げた。彼のそこにはスウ・エックと同様に睾丸がなかった。一物の下には赤い亀裂が入っていた。

「見えるか」

男爵はナダル・ヤークの女陰に指をこじ入れ、開いて見せた。桃色の肉のひだがのぞいた。

「美しいだろう。完璧な美貌をもつた生きた人形なのだ、これは」

レドリュージュの薄茶色の顔に赤みがさしてきた。曇り空のような灰色の瞳にもある種の輝きが宿り始めたように見えた。

はらわた男爵は、我が子の白い肌に長い舌を這わせながら背後に回り、乳房と男根を握った。

「さあ、愛しい我が子よ、奴隷の子よ、おまえの一番美しい姿を見せるんだ。肉の悦びに陶醉し、悶え狂うさまを見せるんだ」

レドリュージュの指は大きな茶色い蜘蛛のようにナダル・ヤークの白い肌の上を這いずり回り、彼（彼女？）に欲情の火をともしようとしました。

ナダル・ヤークは途切れる事なく惨めな声を上げ続けていた。時に低く、時に高く、すすり泣きを交えた声が鉄の部屋に幾重にもこだましていた。私はその声を美しいと思った。意味を持たない調べ

にもならないその声は純粹に音として美しさをもっていた。この声もレドリュージュがつくつたものなのだろうか。彼はある意味では優れた芸術家の魂を持つているに違いなかった。

男爵は鎖に吊るされた白い裸身をいたぶり続けた。エレーネのときよりもはるかに優しく、またはるかに激しく、自分の娘であり息子であるものの体を鞭り続けた。

もみしだかれた乳房はかえって柔らかさをましていき今にもとろけだしそうに見える。桃色の小さな乳首はいつしか固く尖り、その頂きに男爵の舌が触れると、ほっそりした尻に震えが走る。乳房に指が食い込む度に、彼の一物はゆつくりと頭をもたげて行く。先端を覆っていた皮が後退し、桃色の亀頭が顔を出す。男爵の指がそれ

にからまり輪をつくって上下すると、その下に連なる女陰から蜜が溢れ出して白い股を伝わり落ちていくのだった。

ナダル・ヤークのあげている声は、次第に低く、息の速いものとなつていき、快楽が彼／彼女の意志を支配し始めたことを語っていた。

父親の腕の中で、淫欲を駆り立てられ、身悶えする美貌の剣士の姿は、恐ろしく煽情的なものだった。私の頭には扉の怪物に捕えられたときに間近に感じたナダル・ヤークの肌の感触がよみがえって来た。彼を救いだすという意識は心の裏側に押しやられ、男爵に代わつてこの美しいものの体をむさぼり尽くしたいという欲望が脳から背骨の先までを暴れ回っていた。私の一物も十二分に固くなつていたが、スウ・エックの振りかけた麻薬はなお効果を發揮しており、私は動くことが出来なかった。

「ああ……あ……見ろ、自分の体を見てみる」

レドリュージュはナダル・ヤークの頭を押えつけ、下を向かせた。

「どうだ、ほら、勇ましく立っている。こつちはどうだ」

レドリュージュは陰茎の下に指を差し込み、透明な淫液を拭い取った。漏れた指をナダル・ヤークの顔の前に差し出す。

「見ろ。おまえの股ぐらが吐き出したものだ。自分で味わってみるがいい。自分という存在をこの上なくよく理解出来るぞ」

男爵は我が子の震える唇に指を突っ込んだ。ナダル・ヤークは拒むこともせずに、自らの愛液にまみれた父の指を口に含みなめ回した。頭環が切れて、床に落ちた。前髪が美しい顔にかかり表情はよく見えなかったが、灰緑色の瞳には、おぞましい光が宿ったように見えた。ナダル・ヤークは異様に熱のこもった様子で男爵の指をしゃぶり続けた。

「おまえはよく出来ている。私に間違いはなかった。おまえの母はおまえをオロンジの賢い神官に預けた。ガラッド・ガロなる精霊を崇める田舎神官だったが、私はつい一月程前までそのことを知らなかった。奴はおまえの記憶を消して、今まで育て上げたらしいが、どうだ、どうだ、おまえの肌は、おまえの肉は、この父の肌を、肉を覚えていいるだろう」

「覚えている、覚えている……私は……生まれたときから欲情していた……始めに……この口の中にはいつて来た……」

ナダル・ヤークはうわ言のように低い声でつぶやいた。半ば閉じたまぶたは赤く腫れ、その隙間から覗く緑の瞳にはよどんだ鈍い光がちらちらしている。開いた唇からよだれが喉に滴っていく。桃色の舌が何かを求めるように宙を這う。

「そうだ、初めは口だった。生まれたばかりのおまえの唇を犯したのだ。おまえが生まれて初めて飲んだ物は私の精液だ」

男爵は血がべつとりこびりついた顔に喜びの表情を浮かべた。

「次は……どうした……次は……思いだせ」

「次は……次は……そこ……尻の穴」

男爵の左手がナダル・ヤークの尻の亀裂を割っていく。のけぞっていた頭が前にくりと落ち、薄い腹の肉がよじれる。男爵の指が肛門の奥深くへ押し入ったに違いなかった。

「そうだ。おまえの尻の穴を犯した……裂けて血が出た……あの痛みを思い出したか……」

ナダル・ヤークは大きく口で息をし、眉間にしわを寄せた。髪を振り乱し、声にならない声を上げる。男爵の指が尻の穴を出入りする度に口を閉じたり開いたりして悶えるその姿は白痴のようだった。

「……次はどうした……血が出てきたぞ……十年ぶりだからな、裂けて血が出ている……」

「そ……れから……前の穴を……」

レドリュージュは左手は肛門に埋めたまま、右手をナダル・ヤークの女陰に滑り込ませた。彼女の淫裂は十分に漏れそぼっており、男爵の指は泥に埋まるように肉の穴に押し込まれていった。

「ああ……ああ……う……」

淫楽にどっぷり浸かった半男半女は鎖をきしませながら、身をよじった。血と淫汁でぬめる太股で父親の指を締めつける。

「そうだ……ここだ……ここだ」

レドリュージュの両手はナダル・ヤークの前門、後門を激しくえぐり、いたぶる。ナダル・ヤークの一物は今にも弾けそうに怒張し、先端からは透明な汁がひと雫滴り落ちる。

「思い出したか……生まれた時の記憶……十才で生まれた……私の作品の……」

男爵の声音もまた、高まる興奮に打ち震え、大きく見開いた灰色の瞳からは、鋼鉄のような強い光が乱射されている。左手はナダル・ヤークの尻の穴から流れる血で新たな鮮紅色に染まり、右手は“娘”の秘唇の奥深く差し入れられたかと思うと、“息子”の硬直した物を、精を搾り出すようにこすり上げる。

「さあ、出してみろ！射精してみろ……いつてみる……あまは出来るぞ、私がそうつくつたのだから……我が子よ」

レドリュージュは汗でぬめる乳房に歯を立てて噛みついた。柔らかい肌が裂けて、血が流れる。上を向いた乳首が震え、みぞおちが引きつる。

男爵の手が動きを一瞬止めたかと思うと、ひときわ深く、ナダ

ル・ヤークの二つの肉の穴に差し込まれた。ナダル・ヤークは縛られた体を弓のようにそらせて、低く短い嘔吐でもするかのような声を出した。

一物が激しく白い樹液を噴き出した。大きく上下に揺れながら、真つ赤に充血した亀頭から、粘つく液体が勢いよく飛び出して、床に飛び散った。匂いが漂う。

ナダル・ヤークの男根は最後のひとしづくを吐き出した後までもなお、硬さを保ってびくびくと動きを繰り返し、汗と蜜と血にまみれた尻と股はそれにあわせて、激しいけいれんを続けた。

私は自分もまた射精していることに気づいた。暖かくぬめる物が股間を漏らしていた。目の前に赤い霞がかかり、ナダル・ヤークの裸身が輪郭を崩して揺れているように見えた。私は頭をふり、視覚を元通りにしようとした。

周囲の物はすぐ正しい形を取り戻した。私は薬の効果が切れ始めていることに気づいた。頭を動かすことが出来たのだ。

ナダル・ヤークは首を垂れ、力なく鎖に吊るされている。男根もようやく下を向き萎んでいく。床をこする爪先だけが、まだ快樂の余韻を残して、時折反り返り奇妙な動きを繰り返していた。

レドリュージュは幾許かの満足の表情を浮かべて、我が子の姿に見入っていた。やがて、玉座の方に行くとその肘掛けの当たりに手を触れた。大きな音が部屋中に反響し、ナダル・ヤークを吊るしていた鎖が降りてきた。

「スウ・エック、そいつを解け」

宦官は今まで、無言のまま立っていた壁際から歩み寄り、ナダル・ヤークの鎖を解いた。陵辱された者は白いぼろ切れのように床に崩おれた。

男爵は仰向けに倒れているナダル・ヤークを靴先で引っ繰り返した。

「おまえは美しいぞ」

そう言うと、血でぐっしよりになっていた服を脱ぎ出した。男爵

の体はお世辞にも力強いと呼べるような物ではなかった。痩せていて、貧相と言つてよい体格だった。だが、その下半身は瞠目に値する物だった。

股間には異様に硬そうな黒い毛が密生しており、なぜか私にはそれが一本一本ゆつくりと蠢いているような気がした。その中から突き出した男根は人間の物とは思えない異様な有様だった。

今はまだ勃起していないそれは、それでも長さが一メートル（約三十センチ）近くあり、根元から亀頭の下の部分まで、まるで百足か何かのように幾つもの節を持っていた。その節にそつて髭のような物が何本も何本も生えており、硬い疣のような物が幾つもついていた。先の方は黒ずんだ赤みを帯びており、根元の方に近づくに連れて、肌色と紫が混じり合つた気味の悪い色になっていく。それは、それ自体がひとつの生き物であるかのようにゆつくりと身をくねらせていた。

「脱がせろ」

男爵はスウ・エックに命じた。革服の男はまだナダル・ヤークの身に残っていた上衣の切れ端や革の靴を脱がしていった。

「男爵様、この腕輪がどうしてもはずれませんが」

スウ・エックはナダル・ヤークの左手首にはまつた金の腕輪を何とかはずそうとしていたが、それはナダル・ヤークの体の一部にもなつていくかのように離れようとはしなかった。

レドリュージュは不愉快そうにうなずいた。

「かまわん……ふふ……我が子よ……これからもつと素晴らしい世界が見えるぞ……」

レドリュージュは半ば意識を失くしているナダル・ヤークの胸の上に股がった。私のいる所からはレドリュージュの背中とナダル・ヤークの下半身しか見えなかったが何が行なわれているかは想像がついた。ナダル・ヤークの苦しげな鼻息と、唇と喉の奥が、百足のような侵入者と擦れ合つてたてるぴちやぴちやという音が聞こえてきた。

私は全身に虚脱感を感じていた。先刻までの欲情の嵐が吹き去り、この城の腐った空気に犯された脳髄にもわずかながら冷たい風が吹き込んで来たように思えた。

スウ・エックに悟られぬように周囲を見ると、私の剣はほんの二メートルばかりの所に転がっていた。私はじりじりと腕をのぼした。体はまだ、歯車が歪んだ機械仕掛けのようであり、剣までの距離が無限に遠くに感じられた。

レドリュージュは我が子の胸の上で腰をふり、その口と喉を犯し続けている。ナダル・ヤークは足をばたばたとさせたり、腰を捻ったりしていたが、どうやら、それは心中に生まれた新たな淫欲によつて動くのように見えた。彼の股間の物は再び、固くなり始めていたのだ。

剣に手をのぼしながら、私はナダル・ヤークを助ける理由はないのではないかとふと思った。レドリュージュの言うことはどうやらすべて真実のようであり、ナダル・ヤークの体は明らかに父親の行為に承えていた。彼／彼女は彼女の親の言うとおりで、快樂のためにつくられた生ける人形であり、レドリュージュの家畜であり、救い出すという発想そのものが外的なもののような気がした。この気狂いの城にはそれなりの倫理と秩序があり、外部の者がそれを蹂躪することは間違いないのではないかとこの考えが頭をよぎった。

腕はなかなか剣に届かない。私の体内で時の過ぎる速さが狂ってしまったのではないかと思われた。自分の指が虫のように床の上を這いつつて行くのを見ると、気分が悪くなってくる。

親子の狂気じみた交わりは果てることなく続いていく。レドリュージュの背中には汗が浮かび、こびりついたエレネの血の上に汚らしい縞模様をつくっていく。ナダル・ヤークの白い足は爪先を上下させて引きつった動きを繰り返している。股間の物はすっかり固くなり、その下の肉の裂け目からはとめどなく淫らな汁が溢れ出していく。

「……ああ……さあ……飲み、飲み干せ……おまえの飲むべき物はこれ

だ：」

レドリュージュがしぼり出すような声でそう言い、彼の尻は射精したことを示して前後に動いた。ナダル・ヤークのうめき声が聞こえる。

レドリュージュは立ち上がった。巨大な一物は息子／娘の唾液と自らの精液にまみれ、ナダル・ヤークのぽっかり開いた赤い口との間に糸をひいている。ナダル・ヤークの口元からは溢れた父親の精液が幾筋も幾筋もしたり落ちていく。白濁した粘液が唇をべつと汚していた。ナダル・ヤークは両手で口のまわりに溢れている精液を拭い、桃色の舌を突き出していいいになめとつた。

「おまえの喉は……具合がいい……尻の方は……」

レドリュージュは子供の髪を引っつかむと引き起こした。ナダル・ヤークは痛みを訴える叫びを上げながらも、床にこぼれた精液に手をのぼしている。

男爵は色情狂と化した我が子の白くぬめる体を裏返しにした。両膝を立てて四つん這いにし、白い尻を突き出させる。血を流している尻の穴と、赤い肉をはみ出させて蠢いている女陰が私からも丸見えになった。

男爵の陰茎はつい今し方の射精からもう回復しており、腹に届かぬばかりに勃起していた。長さはさほど変わらないようだったが、その太さは人の手首よりもひと回りは太そうに見える。それ自体まさに化け物だった。あちこちにはえた髭と太い陰毛はそれぞれが生きた虫のようにのたくり、からみあっている。男根自体もまた、蛇のように釜首をもたげ、左右に揺れ動き、亀頭は縮んだり脹れたりしているのだ。

レドリュージュはその化け物を我が子の裂けた肛門に押し当てた。ぐいと腰を押しつけ、両の手でナダル・ヤークの細い腰を引くと、それはずぶずぶと彼の子の腸の中へ入っていった。一物自体が身をくねらせながら尻の中へ犯し入っていくようにも見えた。

ナダル・ヤークは痴呆のように大きく口を開け、荒い息を吐き出

し、叫び声を上げた。涙と鼻汁とよだれがぼたぼたと床の上に落ちる。肛門はさらに大きく裂けて、血が太股を伝い流れていく。

私の手はどうにか剣に届こうとしていた。目の前で起こっていることを整理して理解することは放棄していた。男爵は敵だ。殺さなければならぬ。それ以上の思考は脳が拒否しているような気がした。もししなければ、私もまた城の一員となってしまふような気がした。

指が剣をつかんだ。そして落としてしまった。

石の床に落ちた剣は鉄の壁に響き渡る音をたてた。

男爵は、だが、ナダル・ヤークのはらわたを犯す行為に忙しく、気づかない。

いま一度握ろうとする。足音が迫る。レドリュージュの忠実な家臣であるスウ・エックがこの音に気づかないわけはなかった。

奴は鞭を握り、駆けてくる。何事にも無関心なこの男を動かしているのはなんなのだろうか。

私はふたたび剣を握った。立ち上がろうとする。

スウ・エックの鞭が振りかざされる。もう届く距離だ。

革服の男の靴が赤い物を踏みつけた。彼は足を滑らし、仰向けに引っくり返る。

私の顔に彼が滑った物が飛んでくる。エレネの引き裂かれた心の臓の肉片だった。

私は剣を杖に何とか立ち上がった。スウ・エックは倒れた時に頭を打ったらしく、革の仮面の下でうめき声をあげている。私は剣を振り上げた。

奴の足が私のすねに飛んで来た。痛みと涙がにじむ。体の均衡が崩れて倒れそうになる。

剣を床に突き、どうにか倒れるのは免れた。スウ・エックの腕が突き出され、一瞬の間を置いて鞭が襲いかかって来る。

鞭は私の肩を打ったが、寝たままでは力が入らないらしく、蚯蚓腫れをつくっただけだった。

私は剣を振り下ろした。剣先が床石を打ち火花が散った。スウ・エックは床を転がり私の一撃を避けた。頭を振りながら立ち上がる。とする。

剣を横ざまに振り払う。ほとんど偶然と言ってよかったが私の剣は奴の振り上げた右腕に食い込んだ。肘の先あたりが半ば千切れて、ぶらぶらする。血が噴き出し、たちまち奴の黒革の服を赤く染めていく。

奴は革覆面からのぞく青黒い瞳で、半分になってしまった自分の右腕を見つめた。そして、絶叫した。切断された陰茎から小水がほとぼしした。彼もすべてを超越しているわけではないようだった。

もうひとつの叫びが背後から聞こえた。肛門を犯されていたナダル・ヤークが絶頂を迎えた声だった。

私は叫びながら立ち尽くしているスウ・エックに突っ込んだ。脳天へ剣を叩き込んだ。奴の頭は首のあたりまで二つに裂け、叫び声は止まった。大量の真っ赤な血を撒き散らしながら、奴は倒れた。まだ右手には鞭が握られていた。

振り返ると、レドリュージュはナダル・ヤークから腰を離すところだった。男爵の男根が一節引き出される度にナダル・ヤークの後ろの穴からは新たな血がにじみ出す。ナダル・ヤークは顔を床に押しつけ、溜まった自分のよだれの中へ低いあえぎ声をあげていた。

引き抜かれた男爵の物は血で赤く染まり、その上に白い精液と黄土色の糞がからみついていて。ナダル・ヤークの肛門は陰茎が引き抜かれた後も半ば口を開いたままひくひくと蠢いていた。やがて、とろりと黄色みを帯びた男爵の精液が流れ出してくる。その後からは黄土色の柔らかい固まりがぼとぼと床の上に落ちて悪臭を放った。

レドリュージュはやつと騒ぎに気づいたようで、充血した目で横たわったスウ・エックを見やった。怒りと呼べるような表情は浮かばなかった。

「おや、おや、おまえも加わりたかね……私の邪魔はさせん：

」

レドリュージュは薄い唇をすぼめて口笛を吹くような格好をした。実際には何も聞こえなかったが、それに応えるものがあつた。

後ろの方で、地を揺るがすような音（声？）がした。どこかで一度聞いたことのあるような音だったが思い出せない。

鉄の玉座の左手の壁が突然開いた。隠し扉になっているらしい。例の鎧兜姿の兵士が三人姿をあらわした。

「殺せ！」

レドリュージュが叫ぶまでもなく、奴らは襲いかかって来た。私は男爵に斬りかかろうとしたが、ひとりの兵士に間にいられてしまった。

奴らの剣技は大した腕ではなかったが、三人を同時に相手にするのは今の私には極めて困難なことだった。

ひとり目が正面から突っ込んでくる。恐ろしい速さで死の刃が私のはらわたを串刺しにしようと迫ってくる。

私は右にとんで剣先を避け、壁際まで逃げた。そこには天井から下がる鎖の一本が手の届く所にぶら下がっていた。私はとつさにそれを手に取ると兵士めがけて投げつけた。

鎖は奴の兜をかすめただけだったが、奴はこの思わぬ攻撃にたじろぎ、隙を見せた。私はすかさず、剣を突き入れた。喉笛を斬り裂かれ、兵士は血の泡を吹きながら倒れた。

次の敵がすぐにやって来る。兜の下の顔に私は見覚えがあつた。奴らは二人ともエレーネを助けた時に斬つた色黒の男にそっくりだった。この兵士たちも男爵が城の子宮でつくつたものなのだろうか。

私は残つた二人と激しい剣戟を続けた。私の肉体はどうやら平常な反応を取り戻しつつあり、命を奪われることだけはまぬがれて、闘い続けることが出来た。

兵士たちは無言で剣を振り続ける。どんよりとした目には粘つくような殺気が宿っている。私は刃を交わしながら、彼らの口や鼻や

耳から、あの灰色の虫のようなものが飛び出してくるといふ奇怪な幻想に悩まされた。

この斬り合いの最中に部屋のまん中では、親子の性の饗宴が続けられていた。レドリュージュは兵士たちの腕を信頼しきつているのか、官能の海に溺れて、正常な判断が出来なくなっているのか、ナダル・ヤークとの気狂いじみた行為を止めようとはしなかった。

男であり女である美しい生き物は仰向けに寝かされ、女の部分を百足の化け物のような男根に犯されていた。三本の剣がつくる鋭い角度を持つた空間に、白い足を男爵の腰にからめて激しく身悶えるナダル・ヤークの姿がのぞいては消えた。

私は一瞬の間に極めておぞましい物を目撃した。男爵の秘部の剛毛は蛇のように蠢きナダル・ヤークの反り返つた一物にからまり、締めつけ、尿道までに侵入し、淫らな刺激を与えているのだった。

私たちは壁ぞいを移動しながら闘った。私の腕には疲れが忍び寄つて来た。次第次第に剣が重い物に感じられてくる。新たな汗が噴き出て、動きを鈍くする。

ひとりの男の剣が脇腹をかすめた。すでに私の体には幾つもの小さな傷が口を開け血を流している。胸の鞭の傷も麻薬の効果が切れて、新たな血を流し痛みを増していた。

私たちは斬り結びながら、玉座の前に来ていた。一面に散らばるエレーネのはらわたが、今度は、私の足を捕えた。ぬるりと、腸が足にからまるように引つかかり、私は尻餅をついた。床に溜まつていた血が小さな飛沫を上げる。エレーネの悶絶したままの顔がすぐ脇にあつた。人知を越えた淫楽に酔つた笑みを、死に顔は凝固させていた。

レドリュージュの声が聞こえる。果てしない肉の欲望の頂点を迎えるようとしている。

「……おお……我が子よ……私のけだもの……おまえの子宮を私の精で破裂させてやるぞ……」

男爵とナダル・ヤークの叫びはからまりあい、鋼鉄の壁を震わせ

た。どちらも人間の声とは思われなかった。

二振りの剣が振り下ろされようとしている。私の剣は倒れた拍子に、空っぽになった死体の腹に引っかかってしまい、抜けない。エレーネのはらわたが私の下半身ににじり寄ってくるような気がする。剣先は裏側から彼女の膣に突き刺さっている。

「おお、おお……ううおお……」

男爵の叫びが、また、こだまする。だが、その叫びは明らかに今までのものとは異なったものだった。二人の兵士の動きが一瞬止まり、振り向く。

私は剣をはなし、手前にいた兵士に体当たりを食らわせた。うめいて倒れる奴の手首を思い切り踏みつける。骨が折れる鈍い音がした。

奴の剣を奪い、もうひとりに斬りかかった。浅黒い顔、ぴんとはった口髭、背が高く幾分猫背気味の体つき、そいつは河原で殺した男に瓜二つだった。

「答えろ！ 貴様は俺が殺した男の何だ！」

奴は曇った瞳に怒りの色をくすぶらせて、吐き捨てるように答えた。

「あいつは三番、俺は六番だ」

奴の剣が肩口に打ち下ろされてくる。私は受け取め、切り返し、奴の首をはねた。鮮血を十イート（約三メートル）も噴き上げて奴は倒れた。

手首を砕かれた男は残る左手で、私の剣を捨てようとしている。私は振り向きざま、奴の腰に斬りつけた。革鎧は奴の命を守り、深手は負わせられなかった。奴は血を流しながらも左手に剣を握り、斬りかかって来る。

私は奴の左腕を斬り飛ばし、首の根元に剣を突き刺した。兵士はくるくると回り、赤い雨を辺りに降らせて息絶えた。

レドリュージュの悲鳴はまだ続いていた。ナダル・ヤークから身を離し、男爵はよろよろと立ち上がる。男爵の首には茶色い菱びた

紐のような物が巻き付いていた。彼はそれを引き剥がそうと躍起になつていたが、その物はがっちりと首に食い込み離れようとはしなかった。

ナダル・ヤークは股間から血と白い粘液を溢れさせて、横たわっている。体からは血の気が引き、淫液にまみれた青ざめた体は、ひどく汚ならしく見えた。だが、半眼に開いた瞳からは緑色の鋭い光が放たれている。

私は気がついた。手首の金の腕輪が二つに割れて落ちているのだ。

ナダル・ヤークの体は何者かに糸で吊られる人形のようにふわりと浮き上がった。足が床から掌ほど浮いている。瞳に緑の炎を燃やしたナダル・ヤークの口が動いた。

声が響き渡った。誰の声なのだろうか、低く、暗い影を宿したその声は口を動かしているにもかかわらず、ナダル・ヤークの喉から発されてはいなかった。鋼の部屋のどこからか生まれ、四方の壁に反響し、何重にも重なって聞こえてきた。その声はどこかしらナダル・ヤークのものに似ているような気もしたが、またもうひとり、誰かその声に似た声の主を知っているような気もした。

「カールサ・レドリュージュ、報いを受けよ、ガラッド・ガロはおまえの地獄の所行をこれ以上お許しにはならない。おまえの悪行もこれでお仕舞いだ。おまえがこの世につくり出した苦しみと悲しみを自分自身で永劫に味わうがよい。グーリヤンの住人がおまえの血と肉を望んでいる。第八層に棲むものたちがおまえを迎えてくれようぞ」

ナダル・ヤークの目から発する緑の光が鋭い光の矢となって、もかく男爵に突き刺さるように見えた。

レドリュージュは首筋から血を流しながら、茶色の紐と首の間に指をこじ入れることに成功したらしく、唇を引きつらせながら叫んだ。

「おまえは！ 生きていたのか！ おまえは……くそ！ これはあの時の

……」
茶色い紐の力が強まり、レドリュージュの言葉はそこで途切れた。

「そうじゃ、私はガラッド・ガロに仕える者、ホシュトニクのゼイじゃ。おまえが城で慰み者にして、ナダル・ヤークを産ませる道具にした女じゃ……それは臍の緒じゃ。ナダル・ヤークが私の中にいた時に、私とこの子を結んでいたきずなじゃ……おまえは私の腹を裂き、子供を取り上げたが、私はそれだけは隠し持っていた。生まれる前に奪われた我が子の形見として……」

男爵は口をばくばく動かして何事か言おうとしていたが、言葉にはならなかった。顔は血が昇って真っ赤になり、我が子の臍の緒で締めつけられた首は紫色を帯びてきていた。口からは白い泡が流れ出している。

「城を抜け出してからも、どんな苦勞を重ねて来たことか……おまえの施した異常な術と薬の為に私は人の数倍の速さで年老いてしまった。じゃが、おまえをいつか滅ぼすことを魂に刻み、今まで生きて来たのじゃ……地獄に墮ちよ、レドリュージュ！」

男爵の首筋から血が噴き出した。男爵は唇をすぼめ、耳には聞こえない口笛を吹こうとした。成功したのかどうかはわからない。次の瞬間には、レドリュージュの首と胴は離れ離れになった。血みどろになった床の上にさらに血を流して、首と胴は崩れ落ちた。臍の緒は乾き切った粘土のように崩れて消え去った。

ナダル・ヤークの足がゆっくりと床につく。膝をついて倒れる。私は自分の剣を取り戻すと、ナダル・ヤークの側に駆け寄った。抱き起こそうとすると彼／彼女は目を開いた。灰緑色の瞳にはまだ、鋭い緑の光が消えてはいなかった。

「大丈夫……どこから抜け出す……」
言葉はナダル・ヤークの口から発されていたが、やはり半分はゼイの声であるように聞こえた。ナダル・ヤークは意外にすっかりした足つきで立ち上がった。

玉座の後ろから、また、低いうなり声のようなものが聞こえた。急に部屋の中に冷気が満ちはじめたような気がした。

三人の兵士の傷口から、あの灰色のもやもやとした虫のような物が這いずり出ようとしていた。蚯蚓か蛇がからみあったような灰色の物が、半ば透き通った体をくねらせて、肉と骨と内臓の隙間から染み出してくる。それは死体から抜け出すと、するすると宙に上り互いからみあつて人の頭の数倍の球体となった。

「あれはなんだ、あの虫は」

「私にもよくわからない。レドリュージュは大いなる厄災以前の何かの力だけでなく、異界のものも力も引き出しているらしいが……失われた神々の眷族かもしれない」

ナダル・ヤークが――と言うよりはゼイが、と言った方が、正解だろうが――そう答えた。

玉座の後ろの壁の一部が、耳を引き裂くような音をたてて後退し、上にあがつていった。三十メートル（約九メートル）四方の黒い空間が出現した。その中から泡立つような奇怪な声が聞こえる。強烈な悪臭が私たちの鼻孔を襲う。

黒い四角の中に白いかたまりが浮かびあがつた。灰色の虫どもはするするとそのかたまりの中へと入り込んでいく。かたまりは動き出し、鉄の部屋へと姿をあらわした。

私はそれを目にするのは二度目であつたにもかかわらず、それが何であるか、理解するのにはしばしの間を要した。

黒い大蛇がからみあつているような髪に覆われた、造作の崩れた顔、異様な角度でねじ曲げられ、関節の数すら尋常ではない手足、絶え間なく汚液を垂れ流す赤い口と秘唇。異常な欲望の光を宿した焦げ茶色の瞳。

城門の中で見た幻の巨人が再び私たちの前に姿をあらわしたのだ。

怪物は立ち上がった。この鋼に囲まれた広間なら、どうにか立ち上がることが出来るのだ。そいつの身の丈は五十メートル（約十五

メートル）はあり、決して、この部屋が彼女に取って十分な広さであるというわけではなかったが。

レドリュージュの死体にも異変が起こった。うつ伏せに倒れていた首なしの胴がむくりと寝返りをうった。体の下から何者かに動かされたように見えた。

男爵の一物はまだ生きていたのだ。巨大な百足ののように這いうねり、亀頭を赤く充血させて、それは立った。男爵の体を引っ張り上げるかのように宙を指していきり立つ。下腹部から血が噴き出した。ぶつぶつという肉が切れる音が聞こえてくる。

それは肉片と血管を尻尾のように引きずりながら、レドリュージュの体から離れ、宙に浮いた。節を持った悪魔じみた男根と睾丸が、死骸から離れ、ひとつの生き物のように宙に浮かんでいるのだ。

一物は先端に目でもついているかのように周囲を見まわすような仕草をした。そしてナダル・ヤークめがけて恐ろしい速さで襲いかかってきた。

私は宙を飛ぶ男根に刃を走らせたが、間に合わなかった。それはナダル・ヤークの首に巻きついた。陰毛が、見る見るうちにのびていく。自らの意志を持ってそれはナダル・ヤークの白い肌の上を這い回り、口の中へ、女陰へ、尿道へ、肛門へ、耳の穴や鼻の穴にまで侵入していく。わけのわからないナダル・ヤークの叫びが響いた。

私はレドリュージュの男根につかみかかり引き離そうとする。それは熱く脈打っており、ぬるぬるとした感触に思わずたじろぐ。髭が鋭い針のようになって私の手を刺す。血が溢れる。刺されたところがひどく熱い。

巨人の女は喉の奥で雷のような音を発して、私たちを見下ろしている。これは現実の存在なのだろうか。剣が突き抜ける幻であって欲しかったが、化け物は兵士の死骸とエレネの死骸、スウ・エックの死骸、それに男爵の死骸をも巨大な手で掻き集め、口

に運んだ。ぼろぼろと肉とはらわたのかけらがこぼれる。よだれと獲物の血をだらだら垂らしながら、巨女は死体をむさぼり食った。生きた御馳走は後からというつもりなのだろう。

レドリュージュの一物は私の手の中のび始めた。信じ難いくらいにそれはのびていき、亀頭をナダル・ヤークの女陰に突っ込もうとする。奇怪な生きた陰毛によつてすべての肉穴を犯されているナダル・ヤークは鼻汁と涙を垂れ流し、口からは嘔吐物を滴らせている。瞳の緑の光は弱まり、ふたたび、気狂いじみた欲情の炎が点ざれようとしているようだった。

背後では巨人が死体の骨をかじる音が聞こえる。次の獲物に取りかかるのはもうすぐのことだろう。私はこの化け物に食われる前にどんな運命が待ち受けているかと思うと思わず身震いした。あの化け物も男爵のつくりだしたもの例外ではなく、果てることのない淫らな欲望がその巨大な肉体に渦巻いているのは間違いないかった。

男根の化け物は離れない。すでに蛇のようにのびたその先端はナダル・ヤークの陰裂に埋没しており、淫らな動きを繰り返している。ナダル・ヤークの体はこの化け物の侵入にも応えはじめ、頬が紅潮している。

巨人の悪臭と体温が迫ってくるのを背中が感じる。

私は剣を男爵の一物に押し当てた。筋を持ったそれは意外に固い。ナダル・ヤークまで傷つけてしまう恐れは十分にあったが、このままでは助からないのも明らかだった。

私は腕に力を込めて、男根の怪物を半ばから切断した。勢い余つて刃がナダル・ヤークの下腹を斬つてしまう。

男爵の一物はびくびくとのたうち、汚らしい液汁を撒き散らした。赤い血と、白い精液と、得体の知れない紫がかつたものも噴き出す。先端部は驚くべきことにナダル・ヤークの体内に逃げこもうとする。必死でつかみ、引きずり出した。ナダル・ヤークの喉が淫らな音をたてる。

それは一メートル（約三十センチ）以上も彼女の内部に入りこんで

おり、子宮の中まで犯し入っていたのではと思わせた。先端に開いた口から粘つく樹液を滴らせている。

私はそれを床に投げつけ、踏みつけた。靴の下でのたうつそれに剣を幾度も突き刺した。それは引き裂かれた肉の固まりになつて動かなくなつた。

拳丸のついた後ろ半分はまだナダル・ヤークにへばり付いていたが、徐々に力は失われていくようであり白い裸体を這いずつていた剛毛は力なくナダル・ヤークから離れていく。私はそれも床に叩きつけ、踏み潰し、切り裂いた。

ナダル・ヤークは立ったまま、嘔吐し、失禁したが意識はあるようだった。

「……兵士が……出て来た……穴……」

胃の中身に混じつてそういう言葉が吐き出された。

私はナダル・ヤークを肩にかつくと、先刻兵士たちが出て来た隠し扉を目指した。巨人の手がのびてくる。のびた爪にはむさぼり食つた死骸の肉や皮がこびりついている。

なんとかその手を避ける。巨人の漏れた瞳には狂気じみた光が宿っている。まつ毛のないまぶたはほとんど動かず、充血した目の縁には目やなが固まっている。

鼻の穴らしきものが大きく開き、荒い息を吹き出す血に染まった口は言葉にはならないが意味を持った声を吐き出す。

巨人の体軀は余りに大き過ぎ、この広間の中でも自由に動き回るといふわけにはいかなかった。天井から、下がる幾本もの鎖が彼女の動きを妨げる。

私はぐったりとしたナダル・ヤークを背負つて必死に逃げ回つた。怪物は次第に苛立ち、怒りをあらわにしていく。鎖をつかみ引き千切ろうとする。天井の交差する梁が幾本かまとめて折れ、木と鉄の破片が降ってくる。

化け物は凄まじい吠え声を上げる。鉄板にそれは響き、頭が割れんばかりのこだまが飛びかう。

玉座が蹴飛ばされ、壁に叩きつけられた。鉄の椅子は、ひしゃげて、潰れる。

巨大な手が迫る。

私は一か八か、巨人の股間を駆け抜けた。悪臭を放つ液体が頭上から滴り落ちてくる。足許には引き裂かれ、嘔み潰された人間の残骸とあらゆる類いの体液、汚物が溜まり、私の足を捕えようとする。ナダル・ヤークの体が鉛か石でも出来ているかのように重い。

私は玉座のあつた段につまずきそうになりながらも、兵士たちが出て来た入り口に到達することが出来た。獲物を見失つた怪物の怒り狂つた声が部屋を震わせる。拳が鉄の壁を叩く。千の太鼓が打ち鳴らされたような大音響が轟き、巨人は自らのたてた音にますます怒りを駆り立てられる。

私はナダル・ヤークを抱えて、暗い空間に飛び込んだ。

それはこの広間に入つて来たときと同じ、特別な場を持つた扉のようだった。体がばらばらに引き裂かれるような異様な感覚が全身を包む。見えない吹雪が体の内奥まで吹き荒れ、一瞬にして去っていく。

私たちは臓物のような物で壁が覆われた通路に立っていた。振り向けば、半ば開いた扉から暗黒がのぞいている。かすかに巨人の叫び声が聞こえてきたような気がした。

「ここから少し行けば……兵士たちが外へ出る戸口につながっている」

ナダル・ヤークがうわ言のように私の背中をつぶやく。母の意識、記憶はまだナダル・ヤークの脳に宿っているのだつた。

私たちは重い足を引きずりながら、通路を歩いた。ナダル・ヤークは肩を貸せばなんとか歩けたが、しばし、立ち止まって嘔吐を繰り返した。私もまた全身の傷が痛み、流れ出る血が急速に体力を奪っていくのがわかった。

時間と距離の概念は失われた。赤く光る胎内のような通路はどこ

までも続くかに思われた。時折、かなり大きな振動が通廊全体を震わせた。壁や天井から、ひだのよつた正体不明の物質が剥がれ落ちてくる。主を失った城自体が崩壊に瀕しているのではないかと思われた。

ついに通廊は終わり、私たちは床と天井に肛門のような物がある部屋に着いた。振動は激しくなっており、壁のそちこちが裂けて管状の物が露出し、汚液を噴出し始めた。

「ここでもいいのか」

「そう、今、これを動かす……」

ナダル・ヤークは途切れ途切れに呪文のような言葉をつぶやいた。

「ジュエス……ティル……ナ……」

足許の放射状の口は私たちの重みを支えきれないようにぶるぶると震え、黄色い粘液をにじませている。壁の不定形の物がどさつと音を立てて剥がれ、赤と黄色の液体が噴水のように噴き出す。大地震がおきているかのように壁も床も揺れ動く。

「ジュエス……ティル……ナ……」

私の腕に支えられて、ナダル・ヤークが再び秘密の言葉を口にする。

天井から肉の管が降りてきた。それは乱暴に私たちを包み吸い上げる。肉に包まれて、私たちは運ばれて行った。城の崩壊は進んでいるらしく、管は前に入ったときとは違って、途中で動きを止めたり、異常な力で私たちを締めつけたりした。

今にも息がつまるかと思われたとき、私たちは石畳の上に放り出された。

小さな部屋で中央に石の井戸のような物がしつらえてある。桃色の巨大な肉の管がその中へ震えながら姿を消していった。

部屋には窓があった。そこから見える四角い灰色のものは紛うことなき雲に覆われたイオロープの空だった。

振動はこの地上の部屋も揺るがしていた。床の石組にひびが入

り、天井から裂けた木片が落ちてくる。城の倒壊は間近だった。

私はぐったりしているナダル・ヤークを抱きかかえ、部屋の扉を蹴破った。迫持の向こうに、城門のすぐ裏にある広場が見えた。

ひどい振動の中を私は走った。石組が崩れ、大小の石が降ってくる。足許には巨大な亀裂が走り、そこからおぞましい城の体液が噴き出してくる。

崩れる迫持を危いところで潜り抜け、私たちは噴水のある広場に達した。馬の姿はなかった。

尖塔が大音響と共に崩れていく。もうもうたる土ぼこりと飛び散る石。あちらこちらから黄色みがかった白色や、黒ずんだ赤色の液体が噴き上げている。異臭が鼻をつく。腐った肉と汚物の臭いに未知の悪臭が混じり合い、吐き気を催させる。

鉄張りの城門は閉ざされていた。

中庭の噴水が突然動き出した。水桶を持った少女像へ向けて勢よく噴き上げる。だが、出てくるの清らかな水などではなく、汚らわしい赤や黄色の汚液だった。肉片のような物がそれには混じっているように見えた。

噴水は凄まじい勢いで爆発した。少女像は宙を舞って石畳に落ちて砕け散った。私たちは汚水と石つぶてを浴びて倒れ伏す。

全身に城の血液を浴びて、奇形の巨人が姿をあらわした。ねじ曲がった体を黒ずんだ経血のような赤と、糞尿を思わせる黄色の体液で染め上げ、巨人は噴水の地下より出現した。

満たされぬ欲望で全身を震わせ、巨人は捻じれた手足を振り回す。狂った眼光を放つ瞳が私たちの姿を認めた。

「……門には……兵士たちが出入りする隠し扉がついている……速く……」

ナダル・ヤークはもはや体には全く力が入らないようだったが、唇と喉だけは不可思議な力によって動き、私にそう伝えた。

私はナダル・ヤークの体を引きずるようにして城門の方へ急いだ。巨人は今度こそは自らの情欲と食欲を満たさんと私たちを追い

始める。だが、城は私たちの上にも彼女のの上にも公平に崩れ落ちていき、怪物はなかなか獲物に近づけずに怒り狂う。

あちこちを石に打たれながらも私たちは扉に辿り着いた。ほとんど意識のないナダル・ヤークの白い指が門柱の陰を指差す。

そこには青銅の板から四本の鈍く光る鉄の棒が突き出ており、扉を操作することが出来るようだった。

「どれだ！」

ナダル・ヤークは答えなかった。瞳から緑の光が失せ、鉛のような色が腫れぼったいまぶたの下に淀んでいる。

「くそ！」

私は右から順に棒を押し倒した。一本目、何も起こらない。

巨人は崩れ落ちる塔に打たれて、肩や腕の肉を裂き血を流していた。だが、狂気じみた欲望がその巨軀を動かす。彼女の血は赤かった。

二本目、やはり何も起こらなかった。この機械は壊れているのではないかという思いがよぎる。振動は城壁にも及びつつあり、そこで狭間胸壁が崩れ出していった。

化け物が数イートの所にまで来た。今や自らの血と城の汚液にまみれたその姿は、形容することを拒むものがあつた。

三本目、ぎいという音がした。巨大な門扉の右端がいかなる仕掛けによるものか、人ひとり通れるくらいの大きさに上に滑って開いていく。

私は振り向くと、剣を巨人の血みどろの顔めがけて投げつけた。

今度はそれは突き抜けることなく、化け物の左の眼球に突き刺さった。

耳を聳せんばかりの叫びが上がる。よろめいた巨人の上に城でもっとも高い六角形の尖塔が崩れ落ちてきた。それはほとんど巨人の頭部を直撃し、血と脳が飛沫になって飛び散った。

私はナダル・ヤークを抱きかかえ、扉を潜り抜けた。

そのまま息の続く限り走り走った。背後では巨人の叫び、建物の倒壊

する音、奇怪な物質が噴き出る音が混ざりあい、今にも背中に襲いかかってくるかのように轟いている。

喉が焼けつき、ナダル・ヤークを抱えた腕はしびれて別人のものようだった。石につまずき私は倒れた。もう一歩も走れなかった。

城を見た。

黄灰色の荒れ地にたつ城からは、幾筋もの薄汚れた黄色や赤の噴水が上がっていた。風にのってそれは霧となり私たちの上にも降り注いだ。細かい肉片らしき物も飛んでくる。

塔はほとんどが崩れ落ち、城壁もがらがらと崩壊していった。その都度、新しい傷口が開いたように汚れた液体の噴流が四方の大地を犯していく。地面は不気味な地鳴りと振動を繰り返している。

巨人の叫びはもう聞こえなかった。

やがて、城の建物は完全に崩壊し、瓦礫の山となった。だが、大地の揺れは納まらず、汚液は果てることなく噴き上げている。

ひととき大きな揺れが襲って来た。城を中心に地割れが走る。私はナダル・ヤークの死人のように蒼白な体を抱きしめた。

城が爆発した。雷鳴が千も同時に鳴り響いたかのような音と共に、瓦礫の山は飛び散り、地の底からはその瓦礫よりも大量の、はらわたとしか言いようのない物が噴き上げた。火の山が怒るようになり、赤や紫、黄白色、肌色、それらが汚ならしく混じり合った、大小様々の臓物が地の底から噴き上げた。

天にまき上げられたそれは、雨のように荒野に降り注いだ。血と肉とはらわたの雨が私たちの上に降り注ぐ。地面には城の汚液の河が出来、あちこちに、壁や床を形作っていた不定形の物が小さな塚を築いていった。

降りしきる汚物の雨の中、もはや形を持たない石の山となった城から白い蒸気のようなものが湧き上がった。冷気が押し寄せてくる。乳色と灰色が混ざり合った球形の物が白い霧の中から現われた。ひとつの小屋ほどもある、無数の蛇や長虫がからまり、蠢きあ

うものがゆつくりと空に昇って行く。

それは鼠色の雲と同じ高さまで昇ると、白い霧と共に天空へと駆け上がって行った。

私は動かないナダル・ヤークの裸体を抱えて、泣き叫んだ。鉛色の空からは血と肉の雨が降り、口に目に入り込んだが、私の狂気の叫びは止まらなかった。

気がつくのと、とんでもない悪臭が鼻に飛び込んできた。雲間からこの地では珍しいことに陽光がさしている。暖められた汚物が猛烈な腐敗臭を発していた。

全身に得体の知れない体液やはわたのかけらがこびりついている。服は血と汚物が染み込んで乾き、がさがさになっていった。

ナダル・ヤークがすぐ側に横たわっていた。彼／彼女の裸体は私以上に諸々の体液や汚物がこびりつき、異臭を発していた。腹のあたりに私がつけた傷があつたが血は止まっているようだった。

胸に耳を押し当てると、小さなことごとくという音が聞こえた。静かな息もしている。

突然、彼／彼女を抱きたいという衝動を感じた。こんな姿にもかかわらず、ナダル・ヤークは恐ろしいほどの美貌の持ち主であることにはかわりはなかった。

私は恐る恐るナダル・ヤークの股間に手をのぼした。今は力なくしな垂れている一物とその下の唇を閉ざした女陰に手を触れたかった。

指先が触れたそのとき、陰裂から流れ出して来たものがあつた。黄色みを帯びたレドリュージュの精液だった。それは驚くほど多量にナダル・ヤークの女陰から流れ出し、汚れた大地に染み込んでいった。

私は猛烈な吐き気に襲われた。まる一日何も食べていなかったのので出てくる物は黄色い胃液だけだったが、吐き気はなかなかおさまらなかった。

私はナダル・ヤークを背負い、ギルーベの村を屈指した。

私とナダル・ヤークはゲールガン金貨を手に入れた。

噂によれば、ホシュトニクのゼイは私たちが城を逃げ出した時刻に息を引き取ったということである。

城から帰って、傷が癒えるまで私たちはしばらくギルーベの村に逗留したが、ナダル・ヤークはほとんど何も喋らず、感情らしきものもあらわさなかった。

ある霧の深い朝、私は西を屈指し、彼／彼女は東、オロンジーを屈指して村をたつた。

「オロンジーで何をやる。剣客商売を続ける気か」

ナダル・ヤークは霧の彼方を見つめて穏やかな声で答えた。

「いや、もう剣は握らない。ガラッド・ガ口の神事について学び、出来れば神官になるつもりだ」

ナダル・ヤークは灰色の外套の下に白い上衣と洋袴という出で立ちだった。腰帯には短剣が納まつていたが、もはや彼／彼女は胸のふくらみを隠そうとはしていなかった。

「私は男であり、女であるのだから……俗世を超越するにはこれ以上ふさわしい存在はありえないさ」

そう言つて、ナダル・ヤークは笑つた。美しい笑顔だったが、私はその灰緑の透んだ瞳の奥にどうしても消えない曇りを見たような気がした。

私たちは互いに背を向けて馬を進めた。

一年の後、私はイオロープを去るためにパルターガンの港にいた。港の酒場には船乗り商人たちが、やかましく騒ぎたて、安酒をおおつていた。

私はひとり、隅の席で飲んでいたが、後ろで話している隊商の男たちの声が耳に入つて来た。

「……そりゃあ、もう驚いたさね、いくらドチュロニクスの娼館

だつて、あんな奴にお目にかかれるとは思ひもよらなかつたさ」

髭面の腹の出た商人は遠く、東方の国ラージャンからはるばる来ているようだった。

「ものすごい上玉なんだ。あんなきれいな女は見たことねえ、ちよつと痩せてて、おっぱいなんかあんまりねえんだが……十四、五の小姓つて感じもするんだ」

同席していたダーチェン人がやにやと笑う。

「貴様はそつちの趣味もあるからな、そういうのがお好みなんだぜ」

「黙れ、おまえの御乱行を奥方に御報告しようか。まあ、聞け、そいつと床に入つてびっくりしたのさ。つまりだな、そいつには女の道具だけでなく、男の物もついてるんだよ」

ダーチェン人が高笑いする。

「はは、貴様、とうとういかれたな。ベルンで手に入れたあれをやり過ぎたんだろう」

今まで黙っていたアニヤチ人らしき黄色い肌の男が口をはさんだ。

「希にそういう者もおる。二形と言つてな……わしの故郷では神の子として寺院に捧げられておつた」

髭の男はうなずき、話を続ける。

「そうさね、神の子だよ、ありゃ。あの美しさは……始めは驚いたけどな、後にも先にも俺はあんなすごい女、いや男か、まあどつちでもいいが、抱いたことはない。燃えようといつたら気狂いじみてて鳥肌が立つくらいだつたぜ……」

「ふうむ、なんて名前なんだ、そいつは」

興味を持つたらしくダーチェン人が言った。

「名前か、ええとな……待てよ、なんと言つたかな……」

私はそこで席を立ち、夜更けの港を歩いた。

夜風は冷たく身を切るようだった。

半陰陽というのは希にはみられる者には違いなく、話の主が誰で

あるかなどわかるはずもなかつたが、私の脳裏には娼館の長椅子に派手な長衣をまとつて横たわるナダル・ヤークの姿と、霧の朝、馬にゆられていったナダル・ヤークの姿が重なり合い、混じり合つて浮かび上がった。

あの朝の言葉は自嘲的なものだったのだろうか。神官に向いてるのは、男であり女である者ではなく、男でも女でもない者であるような気がした。スウ・エックの切断された男根が頭に浮かび、ナダル・ヤークの美しい顔をかき消した。

私はうらぶれた娼館の前で足を止めた。元はけばけばしかつたであろう看板は、大方、絵の具が剥がれてしまい、今では一種の風格さえあらわれている。

女を買つた。あまり若くもなく美しくもなかつたが、男を悦ばせる手管は知り尽くしていた。

きしむ寝床の上で私は彼女の中へ一物を突き入れた。女は職業的とも本能的ともつかない声を上げ始めた。冷えきつていた体が暖まり、汗ばんでくる。

私は下半身から湧き上がる快楽の中で、きつとナダル・ヤークは幸福な毎日を送っているに違いないと奇妙な確信を持つたのだつた。